

# 富ノ森城跡

2024年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 富ノ森城跡

2024年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、伏見西部第五地区土地区画整理事業に伴う富ノ森城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

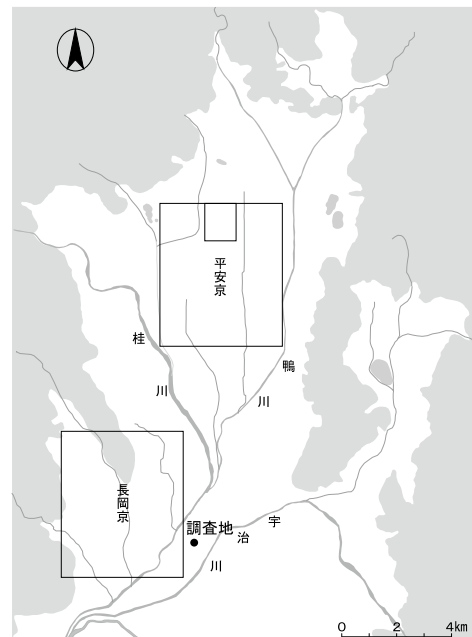
令和6年2月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 富ノ森城跡（京都市番号 22 S 586）
- 2 調査所在地 京都市伏見区横大路六反畑地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2023年4月6日～2023年6月23日
- 5 調査面積 234㎡
- 6 調査担当者 中谷俊哉
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「羽東師」・「納所」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P：東京湾平均海面高度
- 10 使用色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 調査区名 1次調査からの通し番号とした。1次調査を1～3区、2次調査を4・5区としているため、今回調査区を6区とした。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。建物・礎石列は別に番号を付した。
- 13 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、石製品は「石」、銭貨は「銭」を頭に付した。
- 14 本書作成 中谷俊哉  
付章1：中谷俊哉  
付章2：株式会社パレオ・ラボ
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 16 協力者 調査ならびに本書作成には、下記の方々のご協力を得た。  
辻 康男、中路敏治（五十音順／敬称略）

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 鎌倉時代中葉から後葉（第4面）の遺構	6
(3) 鎌倉時代末から室町時代前半（第3面）の遺構	6
(4) 室町時代後半（第2面b期）の遺構	7
(5) 室町時代後半（第2面a期）の遺構	8
(6) 安土桃山時代から江戸時代（第1面）の遺構	9
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	12
(3) 瓦 類	15
(4) 石製品	16
(5) 銭 貨	16
5. ま と め	17
(1) 平安時代中期以前	17
(2) 平安時代後期から鎌倉時代前葉	17
(3) 鎌倉時代中葉から後葉	19
(4) 鎌倉時代末から室町時代前半	19
(5) 室町時代後半	19
(6) 安土桃山時代	19
(7) 江戸時代から近代	22
付章1 史料にみえる「富森」について	23
付章2 基盤層（Ⅸb層）堆積物の鉍物・砂粒分析	27

# 図 版 目 次

- 図版 1 遺構 第 4 面（鎌倉時代中葉から後葉）遺構平面図（1：150）
- 図版 2 遺構 第 3 面（鎌倉時代末から室町時代前半）遺構平面図（1：150）
- 図版 3 遺構 第 2 面 b 期（室町時代後半）遺構平面図（1：150）
- 図版 4 遺構 第 2 面 a 期（室町時代後半）遺構平面図（1：150）
- 図版 5 遺構 第 1 面（安土桃山時代から江戸時代）遺構平面図（1：150）
- 図版 6 遺構 調査区北壁断面図 1（1：50）
- 図版 7 遺構 調査区北壁断面図 2（土層名）
- 図版 8 遺構 調査区東壁断面図（1：50）
- 図版 9 遺構 建物 2・集石 99 実測図、土坑 148 断面図（1：50）
- 図版 10 遺構 溝 110・建物 1・礎石列 1・集石 43・土坑 70 実測図、土坑 90 断面図（1：50）
- 図版 11 遺物 溝 120 - II・170 - I・175・120 - I、土坑 148・87 出土土器実測図（1：4）
- 図版 12 遺構 1 第 4 面全景（北西から）  
2 溝 213（西から）
- 図版 13 遺構 1 第 3 面全景（北西から）  
2 溝 175 断面（東から）
- 図版 14 遺構 1 第 2 面全景（北西から）  
2 溝 120 - II（北から）
- 図版 15 遺構 1 調査区東半 建物 2、柱穴群（北から）  
2 建物 2 柱穴 139・140（南から）  
3 建物 2 柱穴 140 半裁（西から）  
4 集石 99 半裁（西から）
- 図版 16 遺構 1 第 1 面全景（北西から）  
2 調査区東半 建物 1、礎石列 1、柱穴群（西から）  
3 礎石列 1 礎石 32（北東から）  
4 集石 43（西から）
- 図版 17 遺構 1 溝 10（西から）  
2 溝 1（西から）  
3 井戸 122（北から）  
4 井戸 122 半裁（西から）  
5 水溜 59（南から）  
6 水溜 59 半裁（南から）
- 図版 18 遺物 溝 120 - II・120 - I 出土土器
- 図版 19 遺物 その他出土土器・輸入陶磁器、瓦



# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,500）	2
図3	調査前全景（南西から）	2
図4	調査状況（東から）	2
図5	基盤層の調査（北から）	2
図6	調査後全景（南西から）	2
図7	土層模式図（1：100）	5
図8	落込151断面図（1：50）	7
図9	土坑173断面図（1：50）	7
図10	溝175断面図（1：50）	8
図11	溝1・10断面図（1：50）	10
図12	井戸122実測図（1：40）、水溜59実測図（1：30）	10
図13	須恵器甕実測図（1：4）	13
図14	落込151・174、土坑173出土土器実測図（1：4）	13
図15	白磁・青磁実測図（1：4）	15
図16	瓦類拓影及び実測図（1：4）	15
図17	石鍋実測図（1：4）	16
図18	銭貨拓影（1：2）	16
図19	平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構（1：1,500）	18
図20	鎌倉時代中葉から後葉の遺構（1：1,500）	18
図21	鎌倉時代末から室町時代前半の遺構（1：1,500）	20
図22	室町時代後半（b期）の遺構（1：1,500）	20
図23	室町時代後半（a期）の遺構（1：1,500）	21
図24	安土桃山時代の遺構（1：1,500）	21
図25	江戸時代から近代の遺構（1：1,500）	22
図26	江戸時代の淀周辺図と「安永七年 山城州大繪圖」	24
図27	試料採取位置（北から）	27
図28	試料採取層の堆積状況（北から）	27
図29	分析試料中の鉱物・岩石の顕微鏡写真	30

## 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	6
表 2	遺物概要表 .....	12
表 3	分析試料とその特徴 .....	27
表 4	堆積物の粒度組成・重液分離の結果 .....	28
表 5	4 φ 篩残渣中の軽鉱物組成 .....	28
表 6	4 φ 篩残渣中の重鉱物組成 .....	28
表 7	1 φ 篩残渣中の岩石組成 .....	28

## 付 表 目 次

付表 1	土器観察表 .....	31
付表 2	瓦類観察表 .....	33
付表 3	石製品観察表 .....	34
付表 4	金属製品観察表 .....	34

# 富ノ森城跡

## 1. 調査経過

本調査は、伏見西部第五地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、富ノ森城跡に該当する（図1）。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）は、2020年度（1次調査）・2021年度（2次調査）の成果から、今回開発予定地に遺構が良好に遺存していると想定できたため、発掘調査の実施を決定した。発掘調査は京都市から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査区は、1次調査（1～3区）・2次調査（4・5区）に続いて6区とした（図2）。調査面積は、文化財保護課の指導による南北11.7m、東西20mの234㎡である。2023年4月6日から開始し、4面の調査を行った。調査の結果、鎌倉時代中葉から近代にかけての建物、礎石列、溝などの遺構を検出した。さらに下層確認のための断割調査（図7-（ウ）、図版1）を実施したあと、図面作成・写真撮影などによる記録作業を行い、2023年6月23日に調査を終了した。調査区の埋め戻し作業は行わず、6月27日に工事計画者へ調査地を引き渡した。調査期間中は適宜、文化財保護課による検査および、検証委員である京都橘大学一瀬和夫名誉教授の視察を受けた。

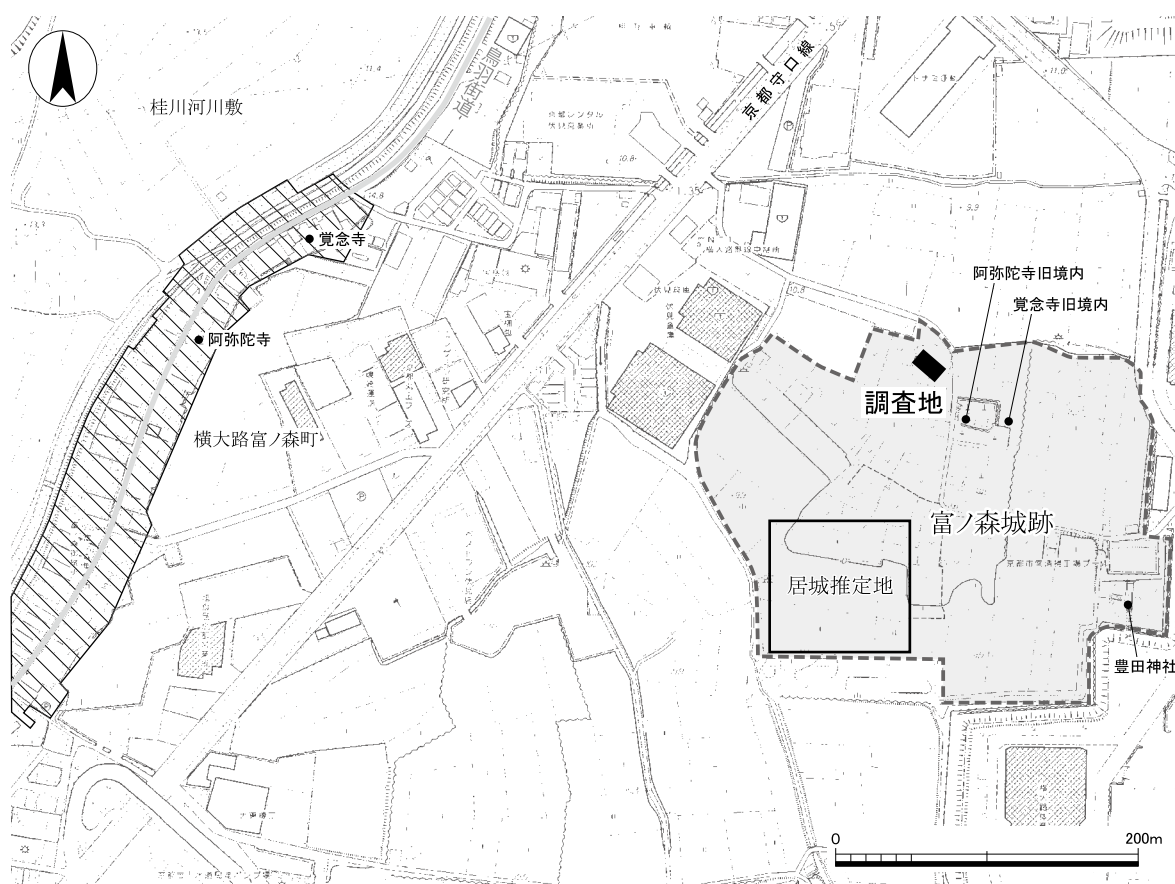


図1 調査位置図（1：5,000）

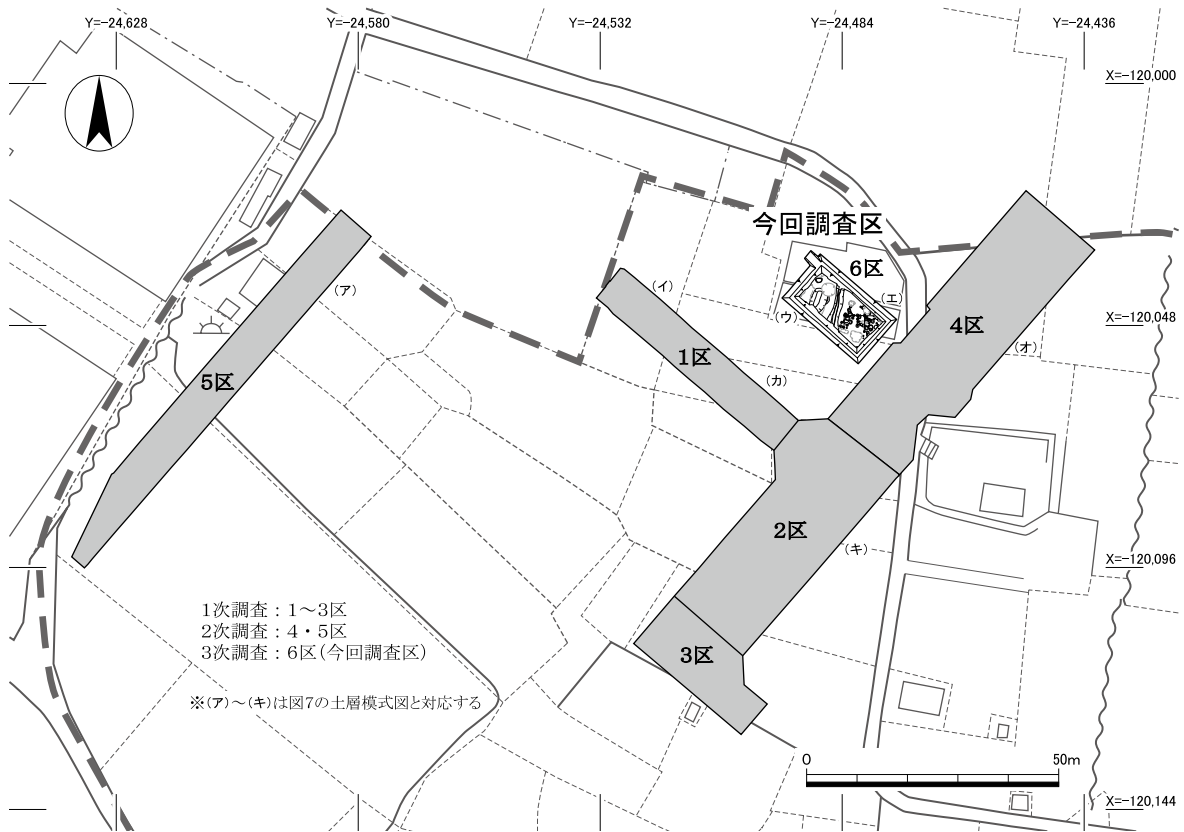


図2 調査区配置図 (1 : 1,500)



図3 調査前全景 (南西から)



図4 調査状況 (東から)



図5 基盤層の調査 (北から)



図6 調査後全景 (南西から)

## 2. 位置と環境

### (1) 歴史的環境と立地

調査地は、京都盆地南西部の、桂川と宇治川に挟まれた沖積地に位置する。調査地南東部を流れる宇治川と調査地との間には、戦後まで横大路沼が広がっており、周囲は水はけの悪い土地であった。富ノ森城は、室町幕府奉行衆の一つである横大路被官衆が、こうした沖積地上に構えた平城と推定されているが、築造年代や築造者については不明である<sup>1)</sup>。

遺跡名の由来となった富ノ森（富森）は、文献上での初見は平安時代後期まで遡る。『山槐記』に、中山忠親が京－福原間を往復する際に富森付近を通過した記事がある（治承4年（1180）8月22日条）。また、室町時代前半の明徳の乱において、山名氏清方の軍勢が京へ攻め上るときに富森を通過しようとした記事があり（『明徳記』明徳2年（1391）12月29日条）、富ノ森が平安時代後期以降、交通路沿いに位置していたことがわかる。

室町時代後半になると、西園寺家が富森から人夫を徴発した記事（『管見記』長祿3年（1459）4月4日条）や、三条西家が富森から貢納物・人夫・人馬を徴発した記事（『実隆公記』永正5年（1508）1月5日・同6年（1509）5月4日条）がみられ、この頃までに集落が形成されたことがわかる。

江戸時代になると、富森村の枝郷が成立したことを示す記事（『山州名跡志』卷之十一、『山城名跡巡行志』第五）が確認できる。枝郷は、納所村の北、鳥羽街道沿いに位置するとあり（前掲註1文献）、現在の横大路富ノ森町（図1）を指していることがわかる。一方で、平安時代後期以来、文献に登場する富森（本郷）について具体的な位置は不明で、当遺跡で確認された集落との関係も明らかでない。

### (2) 既往の調査

富ノ森城跡では、これまでに2020年度（1次調査、1～3区）、2021年度（2次調査、4・5区）の2度にわたり発掘調査を実施している<sup>2)</sup>（図2）。明確に城の存在を示すものはないが、平安時代後期から近代の各種遺構・遺物を検出した。以下では、1～4区と、これらから離れた場所に位置する5区について、それぞれ概要を述べる。

**1～4区の調査** 鎌倉時代中葉から江戸時代の遺構を検出した。遺構の密度は、室町時代後半から安土桃山時代が最も濃密である。遺構の方位は、北に対しおおよそ20度東に振る傾向にある。

鎌倉時代中葉から後葉の遺構には、掘立柱建物、溝、井戸、墓、湿地状堆積がある。掘立柱建物は、小規模な溝で区画された敷地に配置されており、3棟あるうちの1棟が平面規模約10m四方に復元される。井戸は、一辺約0.9mの方形縦板横棧組の木枠に、桶状木製品を組み合わせる。

鎌倉時代末から室町時代前半の遺構には、掘立柱建物、溝がある。鎌倉時代中葉から後葉にみられた湿地状堆積のひろがりがあった空間にも掘立柱建物が建つ。

室町時代後半の遺構には、掘立柱建物、溝がある。4区南半を南北方向に延びる2条の溝に挟まれた空間地は道路の構築土の可能性が高い。掘立柱建物は、大規模な溝で区画された敷地に配置される。道路以東の建物は、他の遺構と方位が異なり正方位を指向する。溝からは多量の貝類や加工痕をもつ哺乳類の骨が出土した。

安土桃山時代の遺構には、道路、掘立柱建物、溝がある。溝からは貝類が出土し、食用加工が指摘される。また、4区北側の溝からは永禄12年（1569）銘墨書が側面にある柿経の束、位牌、卒塔婆といった宗教色の強い遺物が複数出土した。

江戸時代の遺構には、溝、土坑がある。土坑からは貝類が出土し、食用加工が指摘される。

**5区の調査** 平安時代後期から江戸時代の遺構を検出した。遺構の密度は、各時期とも希薄である。遺構の方位は、1～4区とは異なり、北に対しおおよそ50度東に振る傾向にある。

平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構には、溝がある。溝は小規模である。

鎌倉時代中葉から後葉の遺構には、東西溝、土坑がある。土坑のうち1基から鑄造関係遺物が出土した。また、墓の可能性が指摘される土坑1基がある。

鎌倉時代末から室町時代前半には、明確な遺構が確認できなかった。

室町時代後半の遺構には、溝・土坑群がある。北端で検出した東西溝は、1・2区で検出した東西溝の延長線上にあたる。

安土桃山時代遺構には、溝・湿地状堆積がある。湿地状堆積は土坑群埋没後の堆積とみられる。

江戸時代の遺構には、溝・土坑がある。

鎌倉時代中葉から江戸時代までは、東西溝が同じ位置に繰り返し掘削され続ける。

#### 註

- 1) 山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭－復原図と関連資料－」『京都大学人文科学研究所調査報告 第35号』 京都大学人文科学研究所 1986年
- 2) 中谷正和ほか『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年  
中谷正和『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

基本層序は、1次調査（1～3区）、2次調査（4・5区）では、上から現代整地層（I層）、江戸時代後期から近代の整地・耕作土層（II層）、江戸時代中期から後期の洪水堆積・整地層（III層）、江戸時代前期の洪水堆積・整地層（IV層）、安土桃山時代の洪水堆積・整地層（V層）、室町時代後半の洪水堆積・整地層（VI層、VIa層、VIb層）、鎌倉時代末から室町時代前半の整地層（VII層）、鎌倉時代中葉から後葉の整地・耕作土層（VIIIa層）、平安時代後期から鎌倉時代前葉の整地・耕作土層（VIIIb層）、基盤層（IXa層、IXb層）の順に累積していることが明らかになっている。

今回調査（6区）においても、1・2次調査の成果と同じ順序で土層が堆積する。しかし、6区では、II～IV層（江戸時代前期から近代）は現代の削平を受けてほとんど遺存しない。また、VIII層（平安時代後期から鎌倉時代後葉）は、確認できなかった。4区で確認されているVIa層・VIb層は、6区北壁東側で部分的に確認できた（図版7）。

調査地周辺の地形は、東西ライン（図7-(ア)～(オ))を見たとき、現地表面は6区(ウ)・(エ)が最も高く、それより西側(ア)や東側(オ)へ向かうと低くなる。各時代の遺構面や基盤層も同

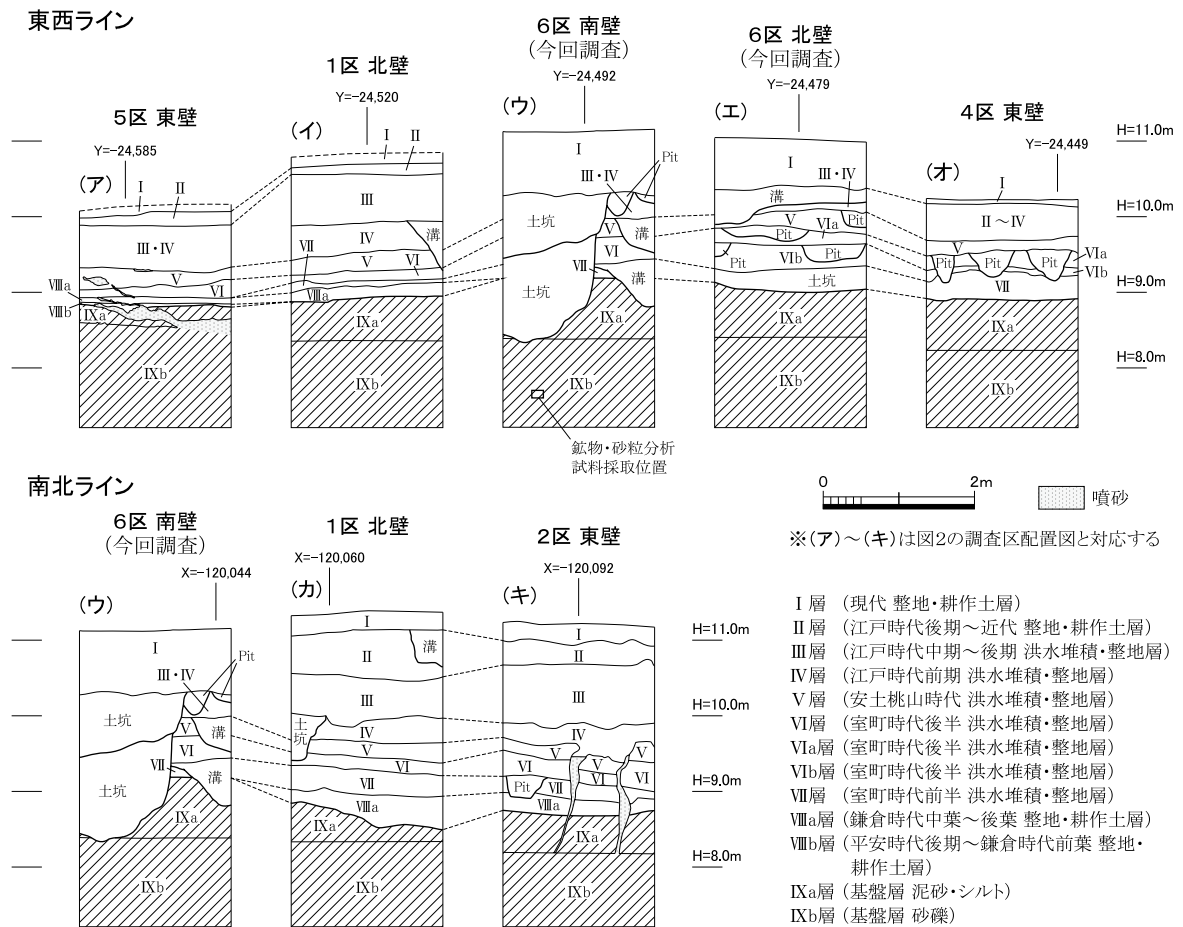


図7 土層模式図 (1:100)

様の起伏を示す。次に、6区を通る南北ライン（図7-(ウ)・(カ)・(キ))を見ると、江戸時代以降は、6区(ウ)から2区(キ)、北から南に向かって地形が高くなる。しかし、江戸時代以前はむしろ6区から2区に向かって地形が低くなる。2区(キ)の標高は、5区(ア)や4区(オ)とほぼ同じである。このことから、江戸時代以前の調査地周辺では、6区(ウ)・(エ)周辺の地形が最も高いといえる。

調査は、V層上面（安土桃山時代：標高10.5～10.6m）を第1面、VI b層上面（室町時代後半：標高9.6～9.7m）を第2面、VII層上面（鎌倉時代末から室町時代前半：標高9.3～9.4m）を第3面、IX a層上面（鎌倉時代中葉から後葉：標高9.1～9.2m）を第4面として調査を行った。

VI b層上面（第2面）で検出した遺構は、新旧関係からa期とb期に分けられる。a期の遺構はVI a層上面から、b期の遺構はVI b層上面から成立する。V層上面（第1面）では、併せて江戸時代以降の遺構も検出した。

なお、今回の調査区で噴砂はみられなかった。

## (2) 鎌倉時代中葉から後葉（第4面）の遺構（図版1・12）

IX a層上面で成立する溝213を検出した。

溝213（図版8・12） 調査区南部で検出した東西方向の素掘り溝である。東側・西側ともに調査区外へと続く。検出規模は長さ約4.2m、幅約0.6m、深さ約0.6mある。底面の標高は東壁際で8.68m、中央で8.67m、南壁際で8.56mある。方位は西に対し約3度北に振る。

## (3) 鎌倉時代末から室町時代前半（第3面）の遺構（図版2・13）

VII層上面で成立する落込151・152・174、土坑173を検出した。

落込151・152・174（図8、図版6・7） 調査区北半で3基の落込を検出した。

落込151は、調査区北西部で検出した。東半の大部分は攪乱に削平される。西側は調査区外へ続く。平面形は不明で、検出規模は東西約5.7m、南北約3.4m、深さ約0.7mある。埋土中位（図8-第4層）から土師器皿が出土した。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
鎌倉時代中葉～後葉 (第4面)	溝213	
鎌倉時代末～室町時代前半 (第3面)	土坑151・152・174、土坑173	
室町時代後半 (第2面b期)	溝120-II・155-II・170-I・170-II・175	
室町時代後半 (第2面a期)	溝120-I・155-I、建物2、集石99、土坑148	
安土桃山時代～江戸時代 (第1面)	溝30・110、建物1、礎石列1、集石43、土坑70・90、溝1・10、井戸122、水溜59	遺構面の一部が被熱



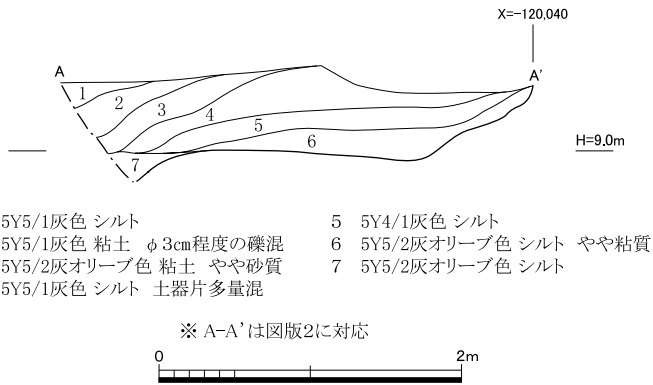


図8 落込151断面図 (1 : 50)

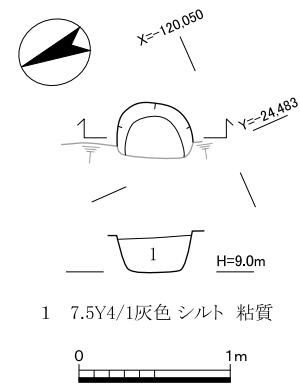


図9 土坑173実測図 (1 : 50)

落込152は、調査区北西部で検出した。南側の一部は攪乱に削平される。東・西・北側は調査区外へ続く。平面形は不明であるが、北側に段差をもって落ち込む。検出規模は東西約1.8m、南北約1.9m、深さ約0.4mある。

落込174は、調査区北西部から中央にかけて検出した。南側と西側の一部は攪乱に削平されるが、調査区北壁では南肩を確認できる。北側と東側は調査区外に続く。平面形は不明であるが、西隣の落込152とは異なり北側に段差をもって落ち込まない。形状の違いから、落込152とは新旧関係をもつ別遺構と考えられるが、攪乱を受けるため明らかでない。検出規模は東西約1.2m、南北約3.1m、深さ約0.6mある。西側の肩口付近で瓦質土器羽釜（図14-24）が出土した。

土坑173（図9） 調査区南部で検出した。西半は攪乱に削平される。平面形は円形で、検出規模は直径約0.5m、深さ約0.3mある。埋土から土師器皿が出土した。

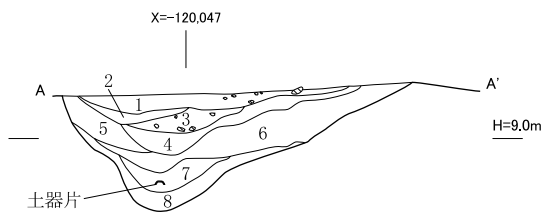
#### (4) 室町時代後半（第2面b期）の遺構（図版3・14）

VI b層上面で成立すると考えられる溝120-II・155-II・170-I・170-II・175を検出した。溝120-IIと溝175は直角に交わり、これら溝の埋没後に新たに掘削された溝170-I・170-IIと溝155-IIも、同じく直角に交わると考えられる。

溝120-II（図版6・7・14） 調査区中央で検出した南北方向の素掘り溝である。北側と南側は調査区外に続く。溝は、埋土下半にⅨa層由来の無遺物層（北壁第57・58層）が堆積したあと、これをさらに掘り直して再整形する。この段階の溝の検出規模は、長さ約10.0m、幅約2.7m、深さ約1.1mある。底面の標高は北壁際と中央で8.58m、南壁際で8.62mある。方位は北に対し約10度東に振る。埋土上半は、土師器皿をはじめとする土器類を多量に含む（北壁第56層）。

溝155-II（図版8） 調査区南側で検出した東西方向の素掘り溝である。西側と東側は調査区外に続く。検出規模は長さ約2.2m、幅約1.2m、深さ約0.7mある。底面の標高は調査区南東隅で約9.06mある。方位は西に対し約5度北に振る。

溝170-I・170-II（図版6・7） 調査区中央で検出した南北方向の素掘り溝である。溝170-Iは、溝170-IIの埋没後にほぼ同位置に掘削される。溝170-Iの掘削によって、溝170-IIの東肩は削平されている。ともに北側と南側は調査区外に続く。



- 1 7.5Y4/1灰色シルト φ1~6cmの礫混
- 2 7.5Y4/1灰色シルト やや粘質 炭少量混
- 3 10Y4/1灰色シルト やや粘質 φ2~5cmの礫少量混
- 4 10Y4/1灰色粘土
- 5 10Y4/1灰色粘土 炭混
- 6 7.5Y4/1灰色粘土
- 7 7.5Y4/1灰色粘土
- 8 10Y4/2オリーブ灰色 細砂 粘質

※ A-A'は図版3に対応



図10 溝175断面図 (1:50)

溝170-Iは、検出規模が長さ約9.1m、幅約0.7m、深さ約0.5mである。底面の標高は北壁際で9.12m、中央で9.08m、南壁際で8.71mある。方位は北に対し約10度東に振る。

溝170-IIは、検出規模が長さ約8.7m、幅約0.6m、深さ約0.5mである。底面の標高は北壁際で9.17m、中央で9.12m、南壁際で8.92mある。方位は北に対し約10度東に振る。

溝175 (図10、図版8・13) 調査区東側で検出した東西方向の素掘り溝である。西側は溝120-IIと直角に交わり、東側は調査区外に続く。検出規模は長さ約7.9m、幅約2.3mある。深さは約

0.8m分検出したが、遺構面の高さを考慮すると本来は約1.0mあったと考えられる。底面の標高は北壁際で8.54m、中央で8.52mあり、溝120-II底面の標高よりわずかに低い。方位は西に対し約10度北に振る。

#### (5) 室町時代後半 (第2面a期) の遺構 (図版4・14)

VI a層上面で成立する溝120-I・155-I、建物2、集石99、土坑148を検出した。溝120-Iと溝155-Iは直角に交わりと考えられる。

溝120-I (図版6・7) 調査区中央で検出した南北方向の素掘り溝である。北側と南側は調査区外に続く。検出規模は長さ約9.5m、幅約2.2m、深さ約1.1mある。底面の標高は北壁際で8.68m、中央で8.62m、南壁際で9.08mある。方位は北に対し約10度東に振る。埋土は、最大厚約0.6mの暗褐色粗砂 (北壁第38層) が一度に堆積し、溝を埋める。洪水堆積とみられる。

溝155-I (図版8) 調査区南側で検出した東西方向の素掘り溝である。西側と東側は調査区外に続く。検出規模は長さ約0.6m、幅約0.3m、深さ約0.2mある。底面の標高は、底面が調査区外にあるため不明である。方位は西に対し約7度北に振る。

建物2 (図版9・15) 調査区東部で検出した掘立柱建物である。南側は攪乱により削平され、東側は調査区外に続く。検出規模は東西約5.9m、南北約3.1mある。方位は北に対し約1度東に振る。柱間は1.4~3.2mの幅があり、等間隔でない。柱穴の掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mある。柱痕は直径約0.1mある。4基の柱穴に地下式礎石が残る。

集石99 (図版9・15) 調査区東部で検出した。平面形は円形で、検出規模は直径約0.5m、深さ約0.2mある。埋土中の石材は、長辺約0.1~0.2m、短辺約0.1mの円礫である。

土坑148 (図版9) 調査区西部で検出した。北側は攪乱に削平され、南側は調査区外に続く。平面形は南北方向に長軸をもつ隅丸方形で、検出規模は南北約4.7m、東西約3.1m、深さは約1.4mある。

## (6) 安土桃山時代から江戸時代（第1面）の遺構（図版5・16）

V層上面（安土桃山時代）で成立する溝30・110、建物1、礎石列1、集石43、土坑70・90、Ⅲ層上面（江戸時代中期から後期）で成立する溝1・10、成立面不明（江戸時代以降）の井戸122、水溜59を検出した。以下、安土桃山時代、江戸時代の順に記述する。

### 安土桃山時代の遺構

**溝30**（図版6～8） 調査区東側で検出した。北側・南側・東側は調査区外に続く。平面形は不明で、検出規模は長さ約1.7m、幅約0.7m、深さ約0.5mある。方位は北に対し約10度西に振る。検出位置から4区（2次調査）で検出した溝1320の延長部に相当すると考えられる。

**溝110**（図版10） 調査区南側で検出した南北方向の素掘り溝である。中央を溝1により削平され、南側は調査区外に続く。検出規模は長さ約3.3m、幅約0.5m、深さ約0.1mある。底面の標高は、北側で9.59m、南側で9.57mある。方位は北に対し約7度東に振る。

**建物1**（図版10・16） 調査区東部で検出した掘立柱建物である。南側は攪乱により削平され、東側は調査区外に続く。検出規模は東西約4.5m、南北1.6mある。方位は正方位である。柱間は1.2～1.6mの幅があり、等間隔でない。柱穴の掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.3～0.5m、深さ約0.2mある。柱痕は直径約0.2mある。1基の柱穴に地下式礎石が残る。

**礎石列1**（図版10・16） 調査区東部で検出した南北方向に並ぶ礎石列である。柱間は約1.7m、方位は正方位である。掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.4～0.6m、深さ0.1～0.2mある。石材および石材周辺の遺構面は、上面が熱を受けて赤黒く変色する。

**集石43**（図版10・16） 調査区東部で検出した。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形で、検出規模は東西約0.6m、南北約0.9m、深さ約0.1mある。埋土中には土塊と多量の石材を含む。土塊は一辺0.2～0.3mのシルトブロックで、石材は直径約0.02～0.08mの円礫である。埋土から土師器皿が出土したが、細片のため図化はできなかった。

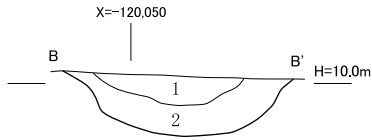
**土坑70**（図版10） 調査区南側で検出した。南西側は攪乱により削平される。平面形は楕円形で、検出規模は長さ約1.4m、幅約0.6m、深さ約0.2mある。埋土から土師器皿が出土したが、細片のため図化はできなかった。

**土坑90**（図版10） 調査区西側で検出した。北西側と北東側は攪乱により削平され、南側は調査区外に続く。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形で、検出規模は長さ約3.6m、幅約2.1m、深さ約0.6mある。埋土から土師器皿が出土したが、細片のため図化はできなかった。

### 江戸時代の遺構

**溝1**（図11、図版17） 調査区南側で検出したL字形の素掘り溝である。西側と南側は調査区外に続く。検出規模は東西方向の長さ約8.7m、南北方向の長さ約3.8m、幅約1.0m、深さ約0.4mある。底面の標高は、西側で9.85m、南側で9.90mある。方位は、東西方向が西に対し約18度北に、南北方向が北に対し約8度東に振る。埋土は、オリーブ色粘土が堆積する。埋土上面は、網代とオリーブ褐色細砂で整地する。

溝1

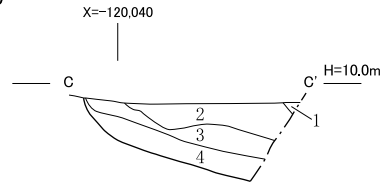


- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂 粘質 底面に網目を敷く
- 2 5Y4/2灰オリーブ色 粘土

※ B-B'・C-C'は図版5に対応



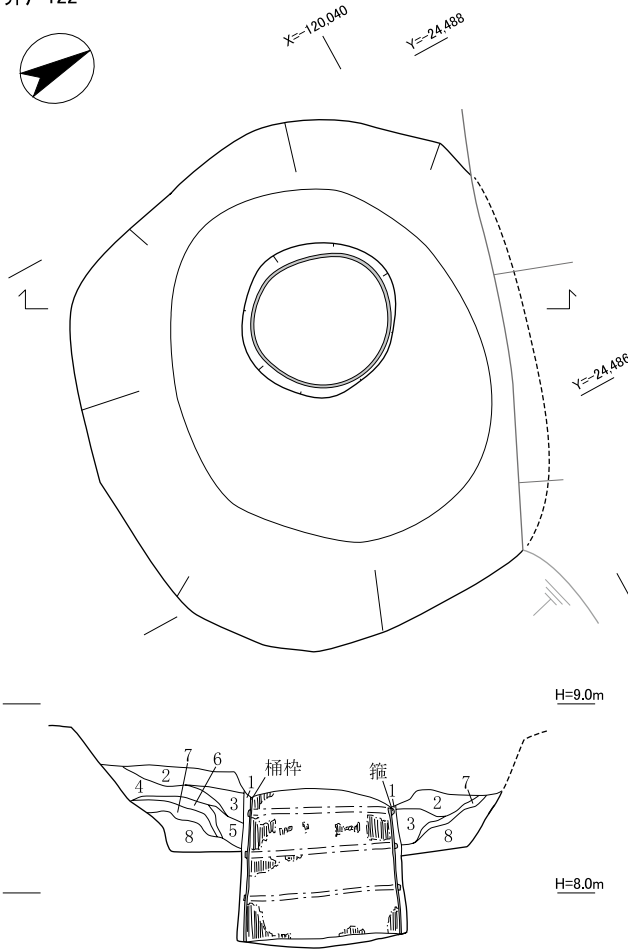
溝10



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘質
- 4 10YR3/3暗褐色 シルト φ0.5~6cmの礫多量混

図11 溝1・10断面図 (1:50)

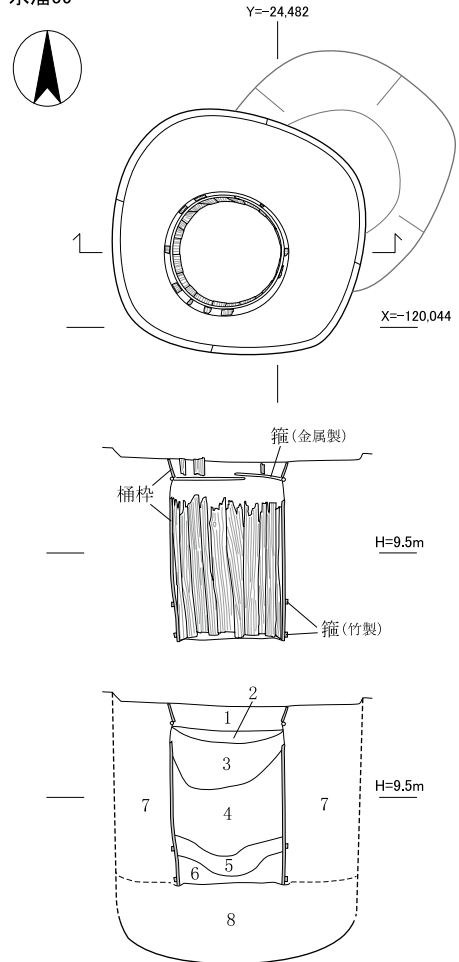
井戸122



- 1 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト 桶枠が粘土化した層
  - 2 2.5GY6/1オリーブ灰色 シルト
  - 3 2.5GY5/1オリーブ灰色 シルト 細砂混
  - 4 2.5GY6/1オリーブ灰色 細砂 シルト混
  - 5 2.5GY5/1オリーブ灰色 細砂 シルト混
  - 6 2.5GY5/1オリーブ灰色 シルト
  - 7 7.5Y4/1褐灰色シルトブロック多量混
  - 8 2.5GY6/1オリーブ灰色 細砂
- 掘形埋土



水溜59



- 1 10YR5/2灰黄褐色 シルト やや粘質
  - 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック混
  - 3 2.5Y5/3黄褐色 シルト 粘質
  - 4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質
  - 5 5Y5/1灰色 粘土
  - 6 7.5Y5/1灰色 粘土
  - 7 7.5Y4/1灰色 シルト 粘質
  - 8 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト
- 埋土
- 掘形埋土



図12 井戸122実測図 (1:40)、水溜59実測図 (1:30)

溝10(図11、図版17) 調査区北側で検出した東西方向の素掘り溝である。西側・東側・北側は調査区外に続く。検出規模は長さ約10.1m、南北幅約1.7m、深さ約0.5mある。底面の標高は、底面が調査区外に続くため不明である。方位は西に対し約24度北に振る。埋土は、洪水堆積とみられる最大厚約0.3m暗褐色粗砂(北壁第12層)が堆積し、溝を埋める。

井戸122(図12、図版17) 調査区北側で検出した。底板を外して倒置させた桶を井戸枠に用いる。北側は溝10により削平される。掘形は、平面形が円形で、検出規模は直径約2.8m、深さ約1.2mある。桶の大きさは口縁部直径約0.8m、残存高約0.8mある。箍<sup>たが</sup>の痕跡が3条確認できるが、材質は不明である。底部は、標高7.71mで、Ⅸb層にまで達する。出土遺物は、京・信楽系の施釉陶器があり、江戸時代中期以降と考えられる。

水溜59(図12、図版17) 調査区東側で検出した。底板を外した桶を上下に2つ重ねて枠に用いる。掘形は、平面形が円形で、検出規模は直径約1.0m、深さ約1.0mある。下部の桶は、大きさが直径0.4~0.5m、残存高約0.6mである。箍は割竹を編んだもので2条確認できる。上部の桶は、大きさが直径0.4~0.5m、残存高約0.1mである。箍は断面円形の金属製で1条確認できる。出土遺物は、京・信楽系の施釉陶器があり、江戸時代中期以降と考えられる。

#### 註

- 1) 第4面については、遺構や整地層から時期が推定できる遺物が出土しなかったため、正確な時期は不明である。しかし、第4面より上位の整地層や、そこから成立する遺構に混入して、鎌倉時代中葉から後葉の遺物が一定数出土している。また、鎌倉時代前葉以前の遺物はほとんど出土しないことから、第4面の時期を鎌倉時代中葉から後葉と想定した。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

整理コンテナにして16箱の遺物<sup>1)</sup>が出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、石製品、金属製品がある(表2)。遺物全体の半数以上を土器類が、土器類全体の半数以上を土師器が占める。時代別では室町時代後半の遺物が多い。各遺物の詳細については付表1～4にまとめた。

### (2) 土器類(図13～15、図版11・18・19、付表1)

#### 鎌倉時代後葉以前の土器

Ⅸb層出土土器(図版19 1・2) 須恵器と灰釉陶器がある。細片のため図化はできず、図版19に写真のみを掲載する。1は須恵器の杯蓋で、古墳時代後期に属する。2は灰釉陶器壺の体部の破片である。平安時代に属する。

その他の出土土器(図13、図版19 3～8) 新しい時期の遺構や整地層への混入品に、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。8以外は、細片のため図化はできず、図版19に写真のみを掲載する。

3は弥生土器の壺で、口縁部から頸部にかけての破片である。弥生時代後期に属する。4・5は須恵器である。4は短頸壺で、古墳時代後期に属する。5は杯蓋で、奈良時代後半に属する。6は灰釉陶器の壺である。体部から底部にかけての破片で、平安時代に属する。3～6は溝120-Iから出土した。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代以前	弥生土器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品		弥生土器1点、須恵器3点、灰釉陶器2点、輸入陶磁器4点、瓦類2点、石製品1点、銭貨1点		
鎌倉時代前葉～後葉	土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器		須恵器2点、輸入陶磁器2点		
鎌倉時代末～室町時代前半	土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、瓦類		土師器13点、瓦質土器3点、輸入陶磁器1点、瓦類1点		
室町時代後半	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品		土師器25点、瓦質土器7点、焼締陶器2点、施釉陶器1点、輸入陶磁器11点、銭貨1点		
安土桃山時代～江戸時代	土師器、瓦質土器、施釉陶器、磁器				
合 計		16箱	83点(7箱)	0箱	16箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

7・8は中世の須恵器である。7は鉢で、片口部分の破片である。いわゆる東播系須恵器で、13世紀前半頃に属する。8は甕で、体部外面に2mm角の格子目タタキ痕、体部内面に同心円状の当て具痕をスリケシ調整した痕が残る。産地は亀山か。鎌倉時代前葉から中葉頃に属するとみられる。7は第2面検出時の西壁際断割、8は第2面掘り下げ時に出土した。

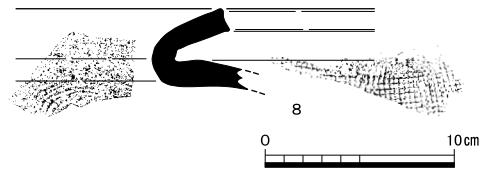


図13 須恵器甕実測図（1：4）

#### 鎌倉時代末から室町時代前半の土器

第3面遺構（土坑173・174・151）から出土した土器である。14世紀前半頃に属するとみられる。

落込151出土土器（図14 9～14）土師器がある。皿S<sup>2)</sup>h（9）、乙訓在地形の皿（10～12）、皿S（13・14）がある。乙訓在地形の皿は口径9.7～10.2cmの大皿である。

土坑173出土土器（図14 15～19）土師器がある。乙訓在地形の皿があり、口径8.1～8.3cmの小皿（15～17）と、口径11.4～11.8cmの大皿（18・19）に分かれる。

落込174出土土器（図14 20～24）土師器、瓦質土器がある。土師器は、乙訓在地形の皿（20・21）がある。大皿（21）は口径11.4cmある。瓦質土器は、椀・鍋・羽釜がある。椀（22）は口径13.4cmで、底部内面にジグザグ状の暗文を施す。鍋（23）は体部外面に煤が付着する。羽釜（24）は体部から口縁部にかけて内傾させ、口縁部外面に2条の段を施す大型品である。体部外面には煤が付着する。

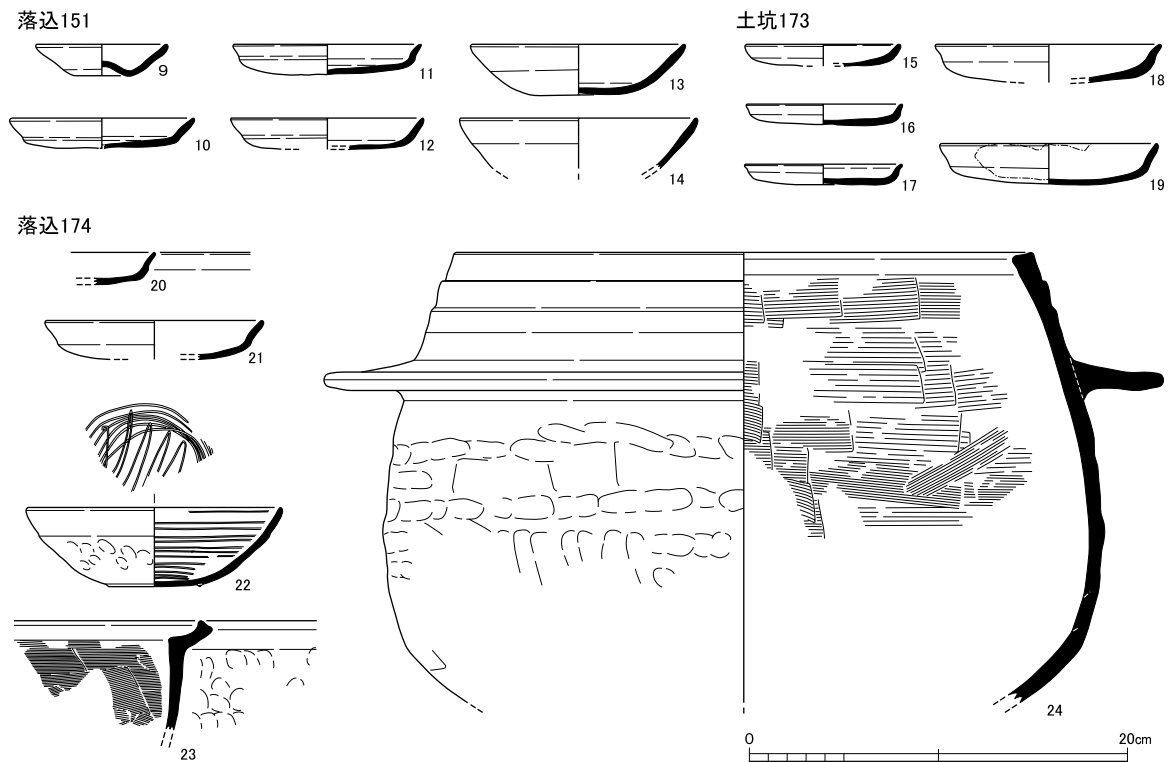


図14 落込151・174、土坑173出土土器実測図（1：4）

## 室町時代後半の土器

第2面b期の遺構（溝120-II・170-I・175）と第2面a期の遺構（溝120-I、土坑148）から出土した土器がある。15世紀頃に属するとみられる。

### 第2面b期

溝120-II出土土器（図版11・18 25～36）土師器、瓦質土器がある。土師器は、乙訓在地形の皿があり、口径6.3～7.7cmの小皿（25～30）と、口径9.3～9.7cmの皿Sを模倣した大皿（31・32）に分かれる。瓦質土器は、羽釜・甕がある。羽釜は、口縁部を折り返す小型品（33）と、体部から口縁部にかけて外傾する小型品（34）、体部から口縁部にかけて内傾させ、口縁部外面に4条の段を施す大型品（35）がある。いずれも体部外面に煤が付着する。甕（36）は体部外面に不定方向の平行タタキ痕がある。

溝170-I出土土器（図版11 37～39）土師器がある。乙訓在地形の皿があり、口径6.8cmの小皿（37）と、口径11.5～11.8cmの大皿（38・39）に分かれる。ただし、他の共伴遺物よりもやや古い時期に位置づけられるため、混入品の可能性も考える必要がある。

溝175出土土器（図版11 40～43）土師器、輸入陶磁器がある。土師器は、乙訓在地形の皿があり、口径6.9cmの小皿（40）と、口径10cm以上とみられる大皿（41・42）に分かれる。輸入陶磁器には、青磁皿（43）がある。15世紀前半から半ば頃に属する。

### 第2面a期

溝120-I出土土器（図版11・18 44～59）土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器がある。土師器は、乙訓在地形の皿があり、口径6.5～7.3cmの小皿（44～48）と、皿Sを模倣した口径9.5～10.2cmの大皿（49～51）、口径14.3～20.2cmの特大大皿（52・53）に分かれる。瓦質土器は、鍋・羽釜がある。鍋（54）は体部外面に煤が付着する。羽釜（55・56）は、体部から口縁部にかけて外傾する小型品である。いずれも体部外面に煤が付着する。焼締陶器は、信楽産の播鉢（57）がある。施釉陶器は、古瀬戸の平椀（58）がある。輸入陶磁器は、白磁皿（59）があり、高台裏に抉り込みを入れる。

土坑148出土土器（図版11 60・61）土師器と焼締陶器がある。土師器は、皿Sを模倣した口径8.6cmの皿（60）である。焼締陶器は、常滑の大甕（61）である。

土坑87出土土器（図版11 62）62は輸入陶磁器の青磁椀である。16世紀頃に属する。

### その他の輸入陶磁器

整地層出土品や新しい時期の遺構・整地層への混入品に輸入陶磁器がある。輸入陶磁器には白磁・青磁があり、今回の調査では破片で32点出土した。1・2次調査と比べて面積あたりの出土点数が多く、調査区周辺における空間利用の特徴を示すと考えられる。

なお、ここに報告する資料のうち、63～65・71・73・74は細片のため図化できなかった。図版19に写真のみを掲載する。

白磁（図15、図版19 63～68）63・64は椀である。63は広東省系で、口縁部から体部の破片である。口縁部は外反し、外面には刻劃文を施す。64は玉縁状の口縁部をもつ。63・64は12世紀



前半頃に属する。65は皿で、口縁部は外反し、内面に型文を施す。14世紀前半頃に属する。66は杯である。14世紀半ば頃に属する。67・68は皿である。ともに高台裏に抉り込みを入れる。67・68は15世紀前半から半ば頃に属する。63が土坑148、64・67・68が第2面掘り下げ時、65が土坑90、66が溝10から出土した。

青磁(図15、図版19 69~77) 69は越州窯系の椀で、高台端部と底部内面に細長い楕円形の目跡がある。11世紀前半頃に属する。70は同安窯系の皿で、底部内面に点綴文を施す。12世紀後半頃に属する。71は龍泉窯系の椀で、外面に立体的な鎬蓮弁文を施す。間弁はなし。内面には使用痕と考えられる不定方向の傷がみられる。14世紀前半頃に属する。72は皿である。底部が碁笥底である。15世紀前半から半ば頃に属する。73~77は椀である。73は外面に細い線刻蓮弁文を施す。74は外面に線刻で雷文を施す。内面には使用痕と考えられる不定方向の傷が顕著にみられる。75・76は底部内面に型文を施す。75~77は16世紀頃に属する。69は井戸122掘形、70・71は溝120-II、72は第1面掘り下げ時、73は溝1、74・76・77は第2面掘り下げ時、75は第1面検出の土坑14から出土した。

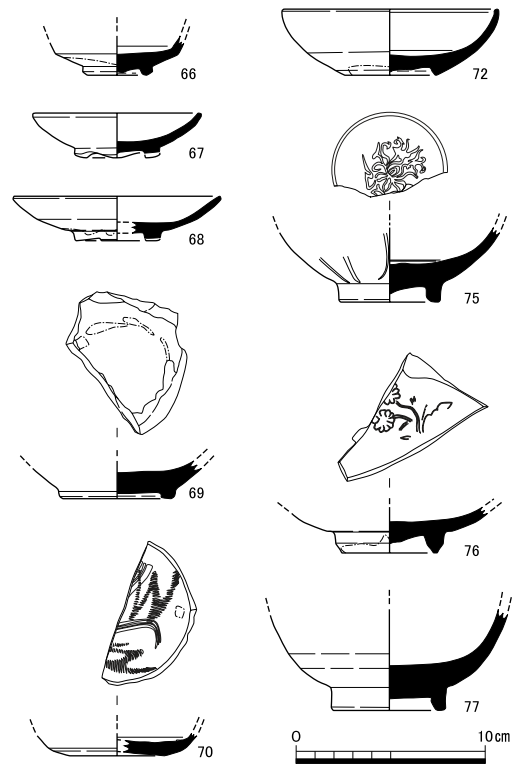


図15 白磁・青磁実測図(1:4)

### (3) 瓦類(図16、図版19、付表2)

軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。

軒丸瓦(瓦1)は、播磨産の複弁六弁蓮華文軒丸瓦で、神出窯跡群、林崎三本松瓦窯、魚橋瓦窯、

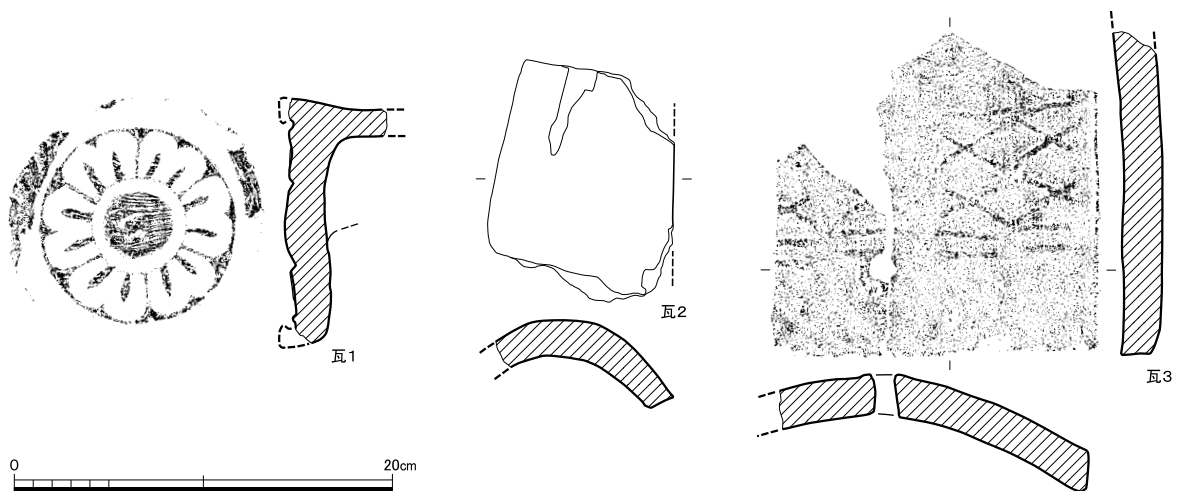


図16 瓦類拓影及び実測図(1:4)

鳥羽離宮跡などに同文がある(附表2)。丸瓦(瓦2)は、焼成が須恵質で、播磨産とみられる。瓦1・2は12～13世紀頃に属する。瓦1・2は第2面掘り下げ時に出土した。

平瓦(瓦3)は、凸面に斜格子と条線を組み合わせたタタキ痕がある。鎌倉時代末から室町時代前半頃に属するとみられる。土坑148から出土した。

#### (4) 石製品(図17、附表3)

滑石製石鍋(石1)がある。外面には加工痕が明瞭に残る。土坑148から出土した。

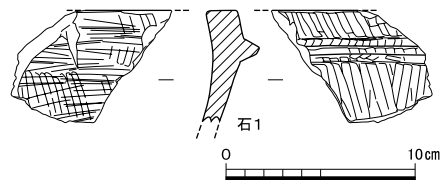


図17 石鍋実測図(1:4)

#### (5) 銭貨(図18、附表4)

皇宋通寶(銭1、1039年初鑄)と永樂通寶(銭2、1411年初鑄)がある。銭1は第2面掘り下げ時、銭2は溝170-Iから出土した。

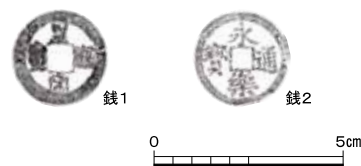


図18 銭貨拓影(1:2)

#### 註

1) 土器の年代については、主に以下の文献に準拠する。

山口 均「乙訓地域の中世土器(土師器皿)編年について」『向日市埋蔵文化財調査報告書第71集 長岡京跡 修理式遺跡・中海道遺跡』財団法人向日市埋蔵文化財センター 2006年  
日本中世土器研究会『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022年

2) 土師器皿の各器形の名称については、以下の文献に準拠する。

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

3) 乙訓在地形の土師器皿の概念については、2次調査(中谷正和ほか『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年)に準拠する。

## 5. まとめ

本調査では、鎌倉時代中葉から近代の遺構を検出した。また、基盤層（Ⅸ b層）堆積物の鉍物・砂粒分析を行い、地形の形成と桂川との関連を明らかにすることができた。以下では、1・2次調査の成果を踏まえた上で、今回の成果を時期ごとに述べる。

### （1）平安時代中期以前

調査地における当該期の様相は、基盤層（Ⅸ a層、Ⅸ b層）の各種分析によって明らかになりつつある。その分析によれば、Ⅸ a層とⅨ b層の性格は以下のように解釈される。

Ⅸ b層は、1次調査での層相観察に基づく分析から、網状流路の河床堆積物を中心に構成された層と解釈される<sup>1)</sup>。河川堆積物は、1次調査と今回調査で、おおそ北から南に流れることが判明した。またその供給源は、今回調査での鉍物・砂粒分析により、桂川にあると推定される（付章2）。層の最終堆積時期は、2次調査で実施した放射性炭素年代測定で、Ⅸ a層最下部（Ⅸ b層の直上にあたる）から得られた炭化物から、2σ暦年代として772calAD - 793calAD（15.6%）・800calAD - 899calAD（65.0%）・920calAD - 956calAD（14.8%）の値が得られたことから、8世紀末から10世紀半ば、おそらく9世紀以前と推定された<sup>2)</sup>。今回、調査で同層から平安時代の灰釉陶器壺（図版19-2）が出土したことで、8世紀初頭以前には遡らないことが明らかとなった。9世紀代に収まると推定できる。

Ⅸ a層は、1次調査での層相観察に基づく分析から、浮遊洪水堆積物を中心に構成された層と解釈される。層の堆積時期は、Ⅸ b層最終堆積（9世紀）からⅧ b層堆積（平安時代後期）までと推定できる。

以上のことから調査地は、9世紀以前は桂川を本流にもつ網状流路の河床に位置していたと考えられる。9世紀以降、しだいに流路が遠のいて氾濫原へと変化し、調査地には近傍の流路から供給された浮遊洪水堆積物（Ⅸ a層）が堆積する。平安時代後期までには微高地が形成され、集落が形成しえる地形条件が整ったと考えられる。

### （2）平安時代後期から鎌倉時代前葉（図19）

6区（今回調査区）では、当該期の遺構を確認していない。2次調査では、遺構は整地層Ⅷ b層上面で成立するが、今回の調査ではⅧ b層が存在しない。これは隣接する1・2・4区でも同様に、遺構はこれより東方の5区に偏る傾向にある。

ただし、当該期の遺物として、1・5・6区では播磨産軒瓦が出土しており注目される。瓦を葺いた建物が近辺に存在したか、あるいは播磨から京内へ瓦を運搬する道中に当遺跡が所在していたことが考えられる。

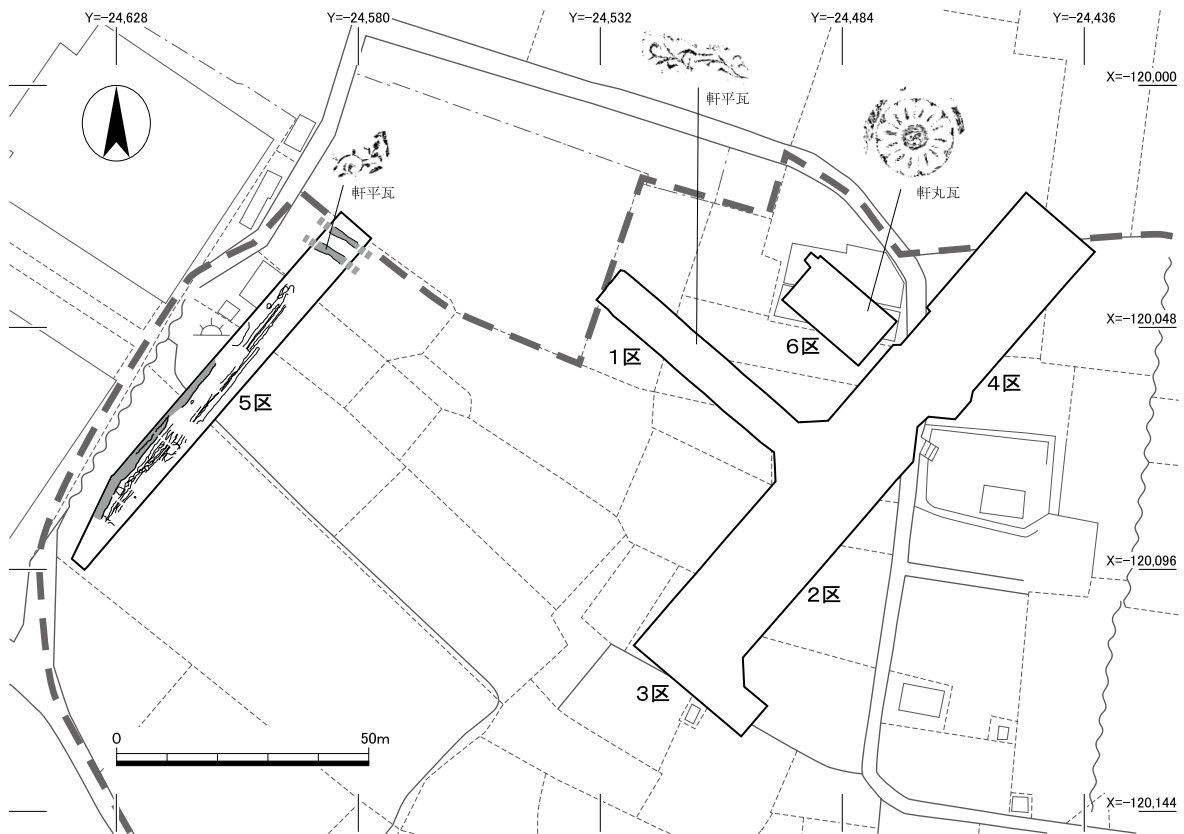


図19 平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構 (1 : 1,500)

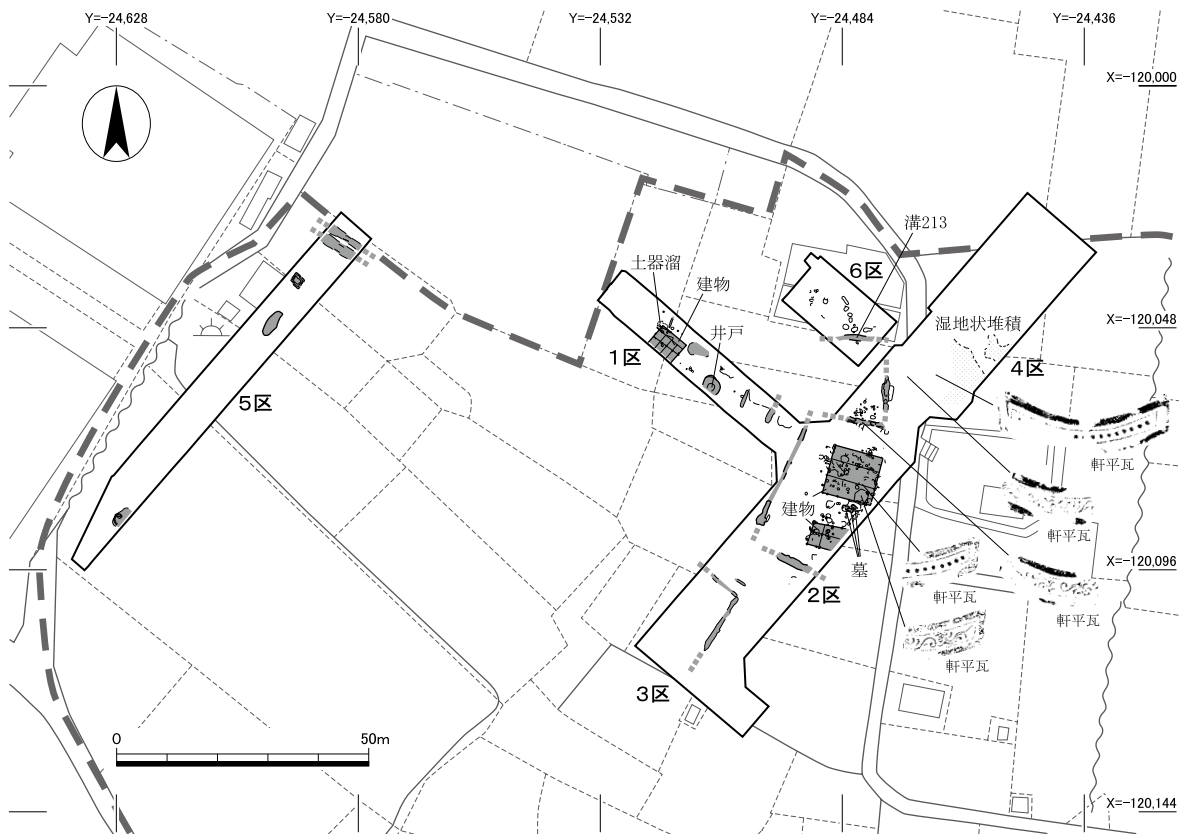


図20 鎌倉時代中葉から後葉の遺構 (1 : 1,500)

### (3) 鎌倉時代中葉から後葉 (図20)

調査区南側で溝213を検出した。今回の調査によって、溝213より北側では遺構が希薄で、顕著な遺構が確認できないことから、調査地周辺における人々の活動の中心は、2区北側の建物周辺にあることが明らかとなった。この建物の周辺では、東福寺(嘉禎2年(1236)創建)創建瓦の同文瓦をはじめ、当該期の軒瓦の出土が集中する。

### (4) 鎌倉時代末から室町時代前半 (図21)

調査区北半部で検出長6～9mの落込3基を検出した。埋土は、いずれもIX a層を母体とするシルトであり、落込174では、その埋土が水平に堆積する(北壁第67～70層)。また落込151では、一度平坦面を作ったあと(図8-第7層)、その上から斜方向に土層が堆積する(同-第1～6層)。このことから、落込は窪みを埋めた整地であると考えられる。6区ではこのほかに人々の生活に関する痕跡は確認できなかった。この時期も、調査地周辺における人々の活動の中心は2区北側にあることが明らかとなった。2区北側では、鎌倉時代中葉から後葉とほぼ同じ位置に建物と区画溝が展開しており、継続的な土地利用が確認できる。

### (5) 室町時代後半 (図22・23)

この時期の遺構は、1～3・5区では1時期のみ確認している。ただし、2次調査で指摘されているとおり、道路沿いの4・6区の敷地でのみ<sup>3)</sup>、b期とa期の2時期確認されており、道路沿いの敷地が人々の活動の場として積極的に利用されたことが窺える。

**室町時代後半(b期)** 6区では、東西方向の大溝(溝175)と、それに接続する南北方向の大溝(溝120-II)などを検出した。南北方向の大溝は、2区の南北方向の大溝(溝255)の北側延長線上に位置し、一連の溝の可能性はある。大溝は他の調査区でも確認されており、今回確認した溝もそれらと同様の性格をもつ遺構であると考えられる。大溝の性格については、1次調査での層相観察に基づく分析から、当該期に頻発した洪水など低湿地型の災害に備えられたものと考えられる。

さらに、今回の調査によって、道路沿い西側の敷地が大溝によって数ブロックに分割された状況が確認できた。敷地の利用状況を考えるうえで、貴重な成果となった。

**室町時代後半(a期)** 4・6区では、b期とほぼ同じ位置で大溝が掘り直される。2・6区では道路西側に接して、4区では道路東側に接して建物を検出しており、道路沿いに建物が軒を並べる景観が復元できるとみられる。

### (6) 安土桃山時代 (図24)

6区では、4区で検出した南北方向の大溝の延長部と考えられる溝(溝30)、建物などを検出した。遺構の配置は、すべての調査区において、室町時代後半とほぼ変わらないことから、継続的な土地利用が確認できる。

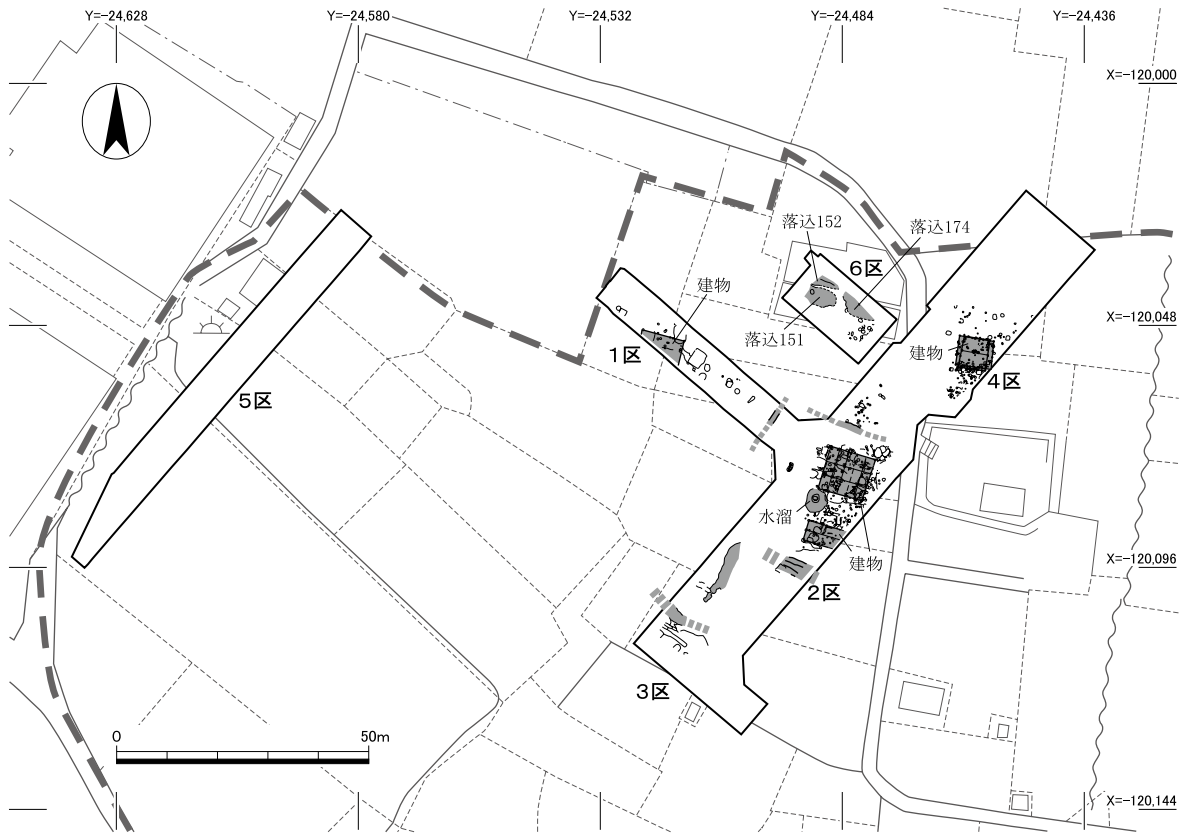


図21 鎌倉時代末から室町時代前半の遺構 (1 : 1,500)

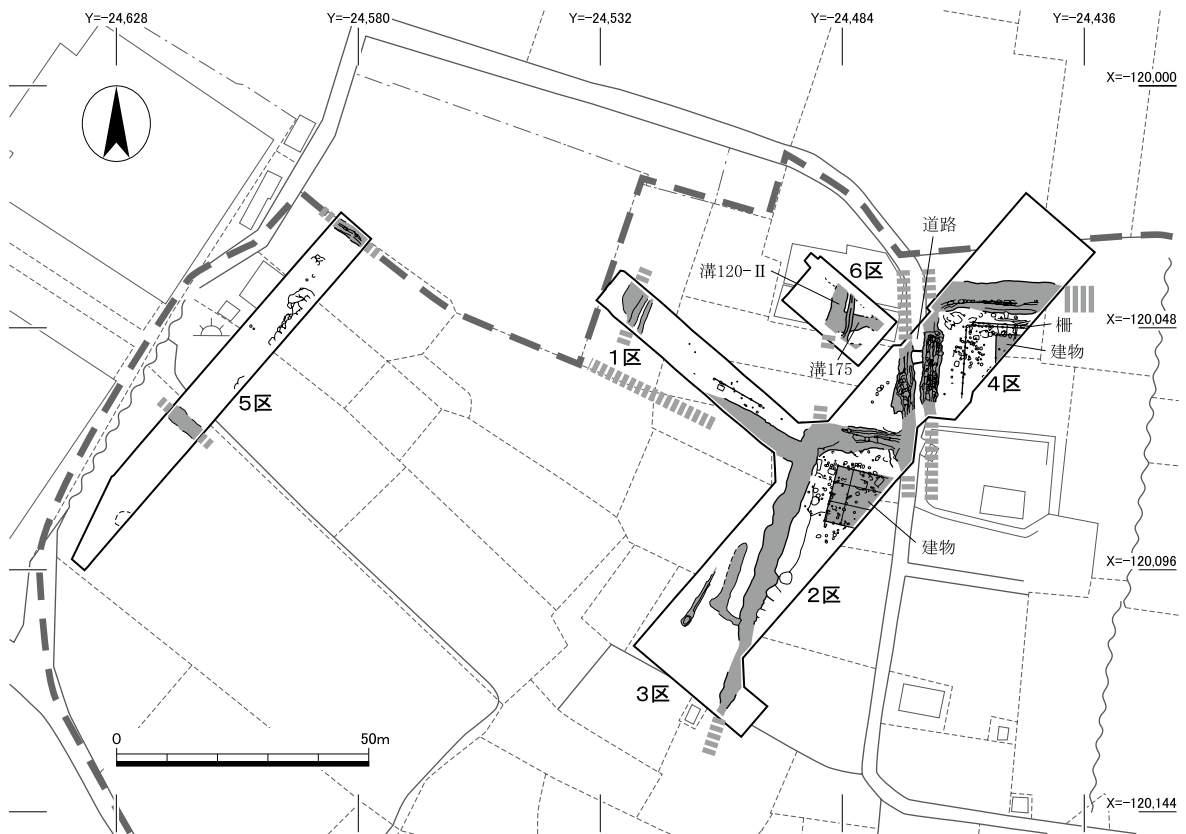


図22 室町時代後半 (b期) の遺構 (1 : 1,500)

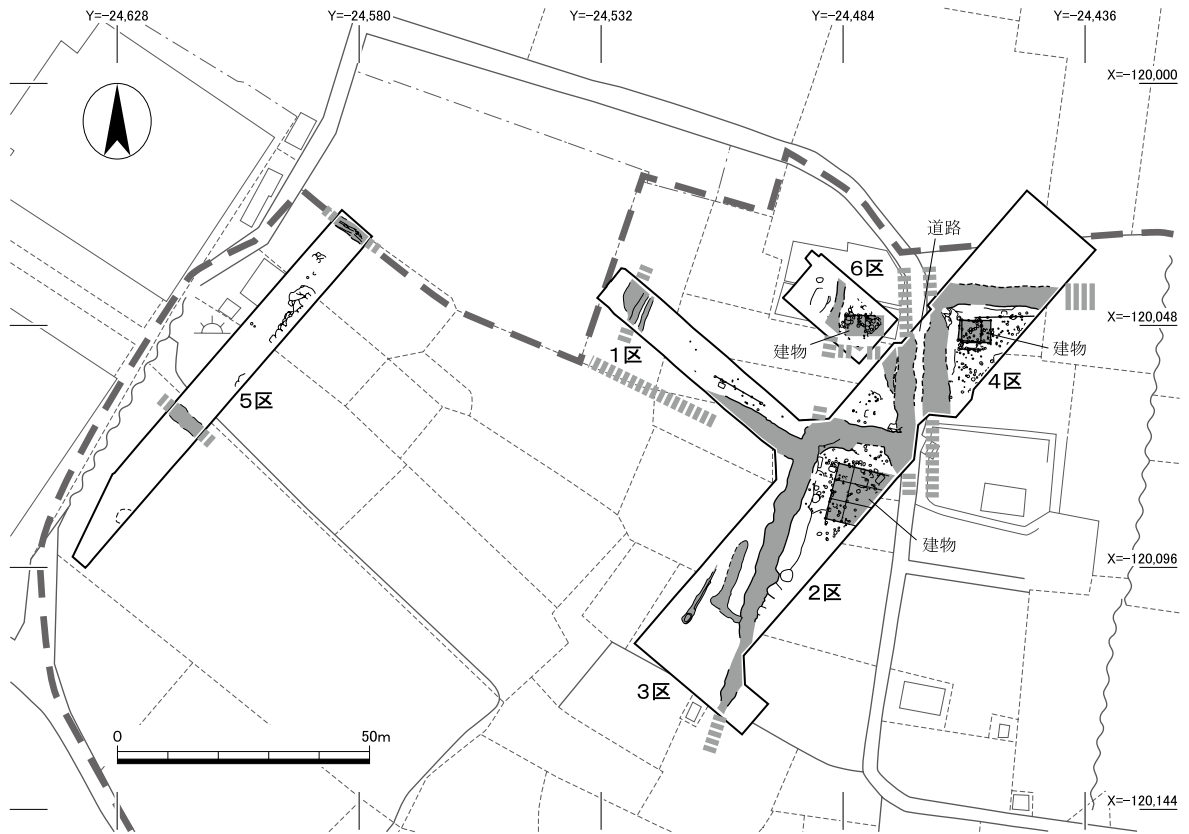


図23 室町時代後半（a期）の遺構（1：1,500）

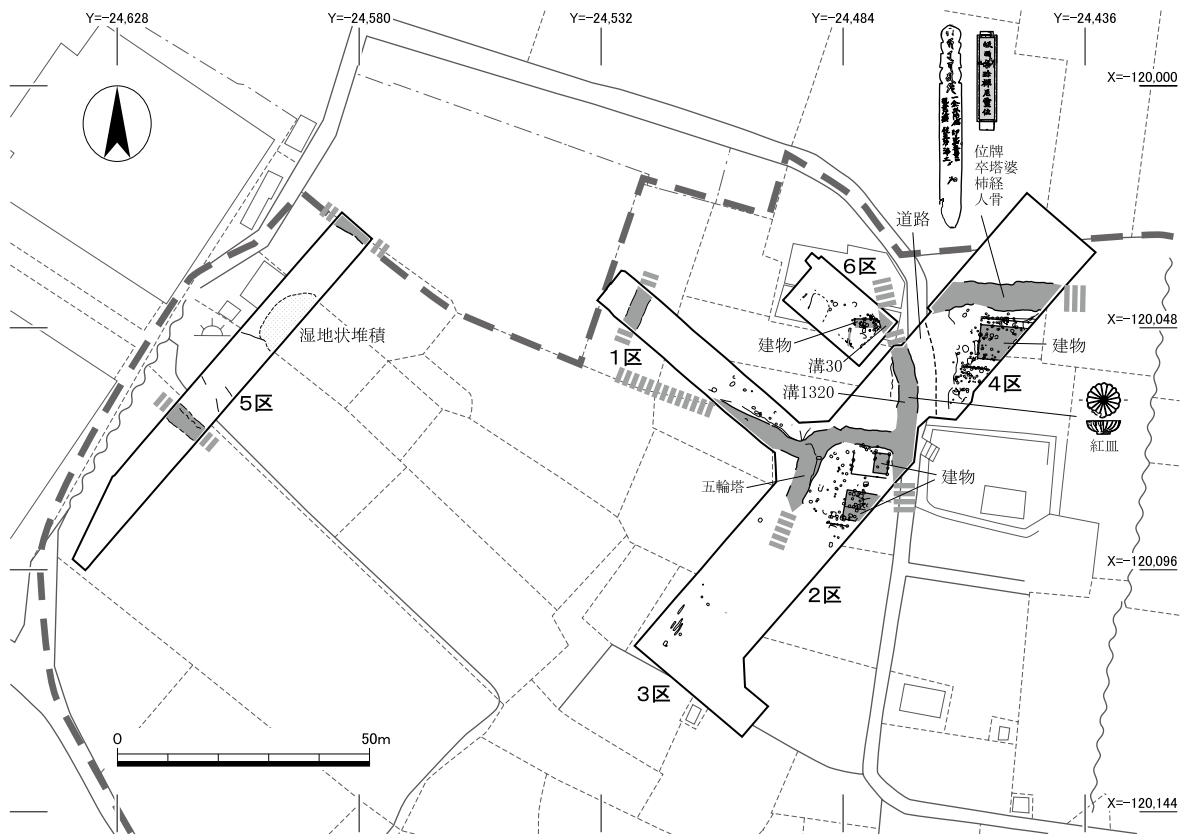


図24 安土桃山時代の遺構（1：1,500）

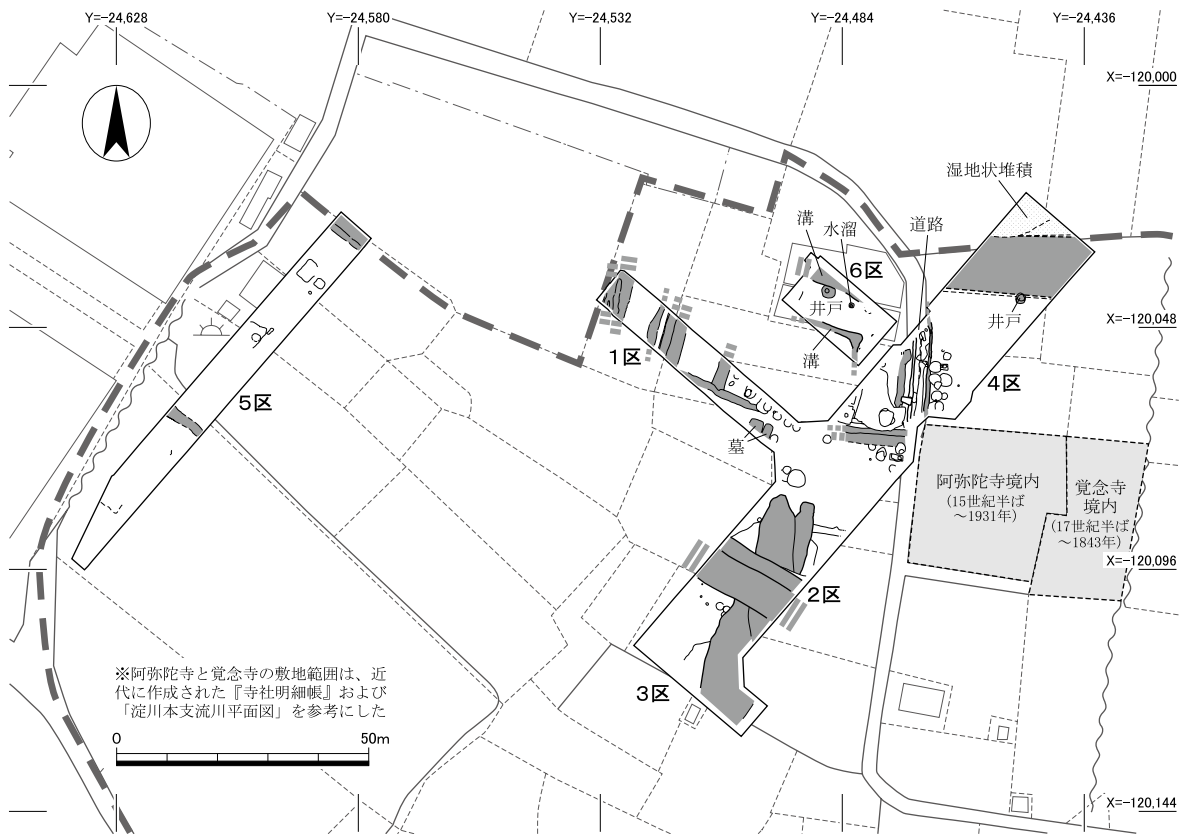


図25 江戸時代から近代の遺構（1：1,500）

## （7）江戸時代から近代（図25）

1～6区では、室町時代後半以来の大溝を踏襲した溝があるほか、比較的小規模な溝を多数検出した。これら溝は、前代の土地区画をさらに細分するかたちで配置されており、現在の土地境界にほぼ対応する。

### 註

- 1) 中谷正和ほか『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年
- 2) 中谷正和『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年
- 3) 2次調査4区では、室町時代から江戸時代にかけての各遺構面で、南北方向の溝に沿って路面・路盤を検出している。室町時代古段階の溝1321・1322間にある第71層（図版22）、室町時代新段階の溝1303・1323間にある第49・50層（同上）、安土桃山時代の溝1320の東肩沿いにある第29層（同上）、江戸時代の溝1157の東肩沿いにある第20層（同上）、溝1009・1014間にある第14・15層（同上）がこれに当たる。これら路面・路盤は、当該報告まとめの文中において、道路の構築土である可能性が高いことが指摘されている。
- 4) 本報告では、2次調査報告での古段階をb期、新段階をa期とした。今回、1～3・5区の遺構は、2時期にまたがると仮定して図22・23の両方に反映させた。



## 付章1 史料にみえる「富森」について

中谷俊哉

当遺跡では、これまで3次にわたる調査を行い、鎌倉時代から安土桃山時代にかけての集落を確認した。この集落は、近代以降の地図には確認できず実態が不明であるが、現在の横大路富ノ森町内に立地することから、近世以前の史料に散見される「富森」に関する可能性がある。そこで本章では、中近世の富森に関する史料の整理を行い、集落との関係について考えたい。

なお、現町名では「富ノ森」と表記されているが、中近世の史料では「富森」「富森村」「富森郷」とあり、「ノ」の字を入れないことが一般的であるため、本章でも「富森」の表記を用いる。

### (1) 近世以降の「富森」

**村の構成** 当村は、慶長6年(1601)に豊国神社領、同20年(1615)に蔵入地となる。村の構成について記した史料として、[史料1・2]がある。

[史料1]『舜旧記』(慶長10年(1605)10月4・5日条)

四日 代官所江罷越富森ニ三日也滞留壽等宗圓道顯孫七忠二郎内検衆也  
五日天晴 枝村内検申付

[史料2]『山城名跡巡行志 第五』(宝暦4年(1754)刊行)「富森」項

納所ノ丑寅ニ在、出戸ハ納所ノ北、鳥羽街道ノ堤ニ在

[史料1]は、4日に本郷の内検が行われ、翌日に枝郷の内検申付があったとする記事である。また[史料2]は、「出戸」の記載がみられる。このほか、『藤田家文書』「乍恐水難ニ付奉願口上書」(天明8年(1788))の連名には、「富森村 庄屋清左衛門」とは別に「富森村枝郷 庄屋与兵衛」がみえる。このことから、近世の村は本郷と枝郷に分かれていたことがわかる。

このうち、枝郷の成立に関する史料として、[史料3～5]がある。

[史料3]『舜旧記』(慶長9年(1604)1月10日条)

巳刻富森へ越了横大路堤申付板倉伊賀片桐市正大坂ヨリ來予罷下兩人へ折菓子ニツ捧之一宿令滞留也

[史料4]『時慶卿記』(慶長9年(1604)1月14日条)

板倉富森堤普請見廻

[史料5]『山州名跡志 卷之十一』(正徳元年(1711)刊行)「富森」項

横大路ノ南三町許ニ在、此ノ所上ニ同ク引移ス所也。元ノ地ハ東ノ方二町許ニ在リ。此ノ所古ヘ森アリ。富杜ト號ス。今亡シ。此ノ元ノ地名ヲ古渡ト名ク。謂フコ、ロハ。古ヘ此邊川原ニシテ。東ハ宇治川伏見川ノ流ニツゞキタリ。往来ハ即チ是ヨリ舟渡シニテ。一口エワタリシ也。今其渡口富ノ森ヨリ巽ニアタル淀堤ノ上ニ。今民家三軒アリ。此ノ所古ヘノ渡口ナリ。今尚渡場ト云フ也

※文中「上ニ同ク」は、前項(「横大路」項の「下鳥羽ノ南ニ在リ人家大路ノ東西ニアリ。此ノ

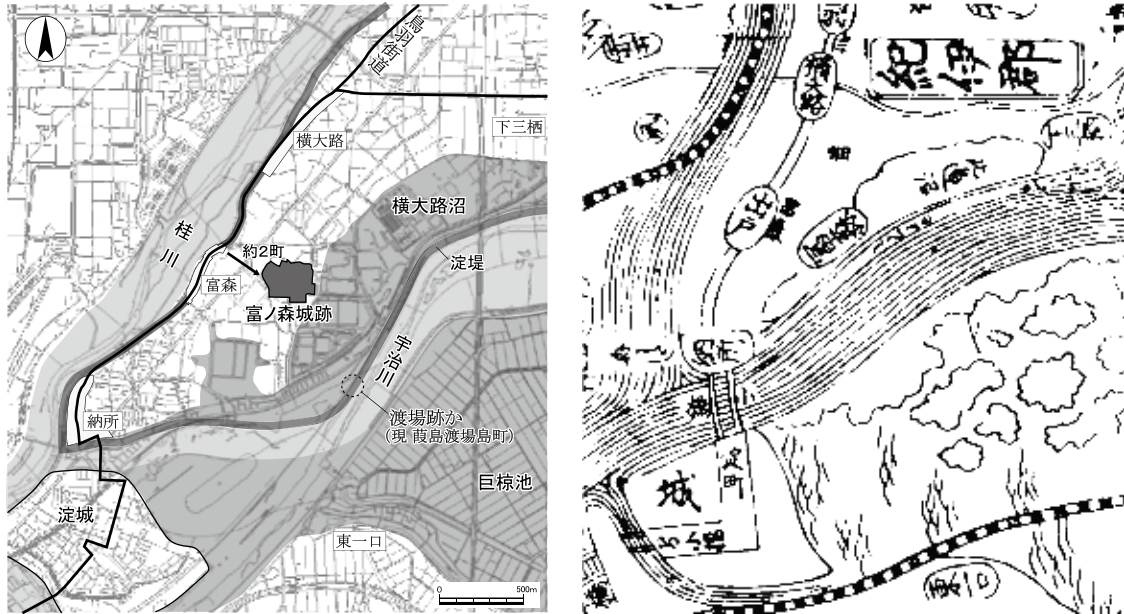


図26 江戸時代の淀周辺図（左図、『宇治市史』2 図41・42を参考に作成、縮尺1：45,000）と「安永七年 山城州大繪圖」（右図、『巨椋池干拓誌』掲載図を一部拡大）

所古ヘニ無シ秀吉公ノ代此ノ堤ヲ築テ。北ハ鳥羽南ハ淀ニ至ラシム。其レヨリ皆人家ヲ堤ノ上左右ニ移スナリ。古ヘニハ東ノ方今田畠ノ地ニシテ中ニ往還道アリ。横大路ト號スルハ伏見ノ城ヨリ西ニ當テ此ノ路攝津ノ國河内等ヨリ都ニ到ル街道ナル謂ナリ」を指す。

〔史料3～5〕からは、枝郷の成立が、15世紀後半の豊臣秀吉による築堤以降、慶長10（1605）年10月の枝郷内検申付〔史料1〕以前であることが想定できる。慶長9年（1604）1月から開始された横大路・富森での堤の整備も、こうした動きと連動する可能性がある。なお、枝郷は現在の横大路富ノ森町に該当する。

以上のことから当村は、豊臣秀吉が村内に築堤したとされる時期（15世紀後半）から、豊国神社領であった時期（1601～1615年）の間に、堤・街道の整備と、枝郷の成立という大きな変化を経て、近世以降の村の姿になったとみられる。

**村の所在地** 枝郷の所在地は、前述のとおり鳥羽街道沿い、現在の横大路富ノ森町である。一方、本郷の具体的な所在地は不明であるが、〔史料2・3〕から、納所村の北東部、また枝郷から東に約2町の地点にあるとみられ、『巨椋池干拓誌』でも指摘されたように、調査地周辺が有力な候補地となる<sup>2)</sup>（図26左）。本郷を横大路沼北岸（調査地周辺）に描く摺物が存在することや（図26右）、枝郷へと移転した覚念寺や阿弥陀寺の旧境内が調査地周辺にあることも<sup>3)</sup>、その根拠とすることができる。ただし、当村を横大路沼南岸の淀堤付近（図26左の渡場周辺）に描く摺物も確認できるため<sup>4)</sup>、所在地の比定にはなお検討を要する。

## （2）近世以前の「富森」

### 室町時代後半以前

史料上の初出は平安時代後期に遡る。

[史料6] 『山槐記』(治承4年(1180)8月22日条)

雨下、暁更參福原、一昨日自新院有召也、於富森邊天曙、於今津差饌、申終剋着大物差饌

[史料7] 『明德記』(明德2年(1391)12月29日条)

去程ニ中務大輔ハ淀ノ橋打渡リ、鳥羽秋ノ山ヲ目ニカケテ、富ノ森ヲ差テ打ケルガ、皆西国勢ニテ無案内ナリシニ依テ、其辺ノ深田ヲモ知ズ打コミテ、馬太腹セメテヲヨギケルガ、次第二先ハ深クナル

[史料6] は、平安時代後期に中山忠親が京-福原間を往復する際に富森を通過した記事である。

[史料7] は、明徳の乱(1391年)において、山名氏清方の軍勢が京へ攻め上るときに富森を通過しようとした記事である。これらの史料から、村の具体的な位置を知ることはできないが、交通路の通過点で、淀と鳥羽秋ノ山の間、現在の富森からそう離れた場所ではないと想定できる。一方で、この頃に明確な集落が形成されていたかは知ることができない。

### 室町時代後半以降

15世紀半ば以降、村の領主の日記など多くの史料で富森が散見される。

[史料8] 『管見記』(長祿3年(1459)4月4日条)

富森人夫召寄之

[史料9] 『実隆公記』(永正5年(1508)1月5日条)

富森若菜、年貢等到来

[史料10] 『舜旧記』(慶長6年(1601)8月20日条)

富森郷罷越百姓中ニ掟之折紙遣了

[史料8~10] は、領主関連の日記である。経緯は明確でないが、当村は西園寺家領、三条西家領、豊国神社領と変遷したようである。また[史料8・9]には、人夫や年貢の徴発があり、[史料10]には百姓がみえることから、この頃には集落が明確に形成されたことがわかる。

[史料11] 『言継卿記』(天文13年(1544)7月9日条)

九日水下辺之体無正体之由雑談、淀、鳥羽上下、富森、横小路等、半分流云々、于今他分不帰往云々

[史料11] は、洪水被害に遭った地域として、桂川左岸から巨椋池北岸にかけて展開する淀、横大路、鳥羽とともに、富森がみえる。この史料からは、村の具体的な位置を知ることはできないが、現在の横大路富ノ森町や今回調査地からそう離れた場所ではないことが想定できる。

**課題** 以上を踏まえると、近世以前の富森については、いくつかの課題が残る。1つは所在地の問題である。おおよそ今回の調査地付近にあることは想定できるが、具体的な位置は明らかでなく、また近世以降の富森(本郷)と同一の集落を指しているかも、現状の史料からだけでは明らかにしえない。もう1つは集落の形成時期の問題である。「富森」の史料上の初出は平安時代後期であるが、明確に集落が形成されていたことが確認できるのは室町時代後半以降である。集落の形成時期がどこまで遡るか、現状の史料のみから言及することは難しい。

### (3) 「富森」と集落

最後に、史料上の「富森」と、富ノ森城跡で確認した集落について比較を行う。

近世以前については、史料上では平安時代後期（12世紀後半）に「富森」が初出し、室町時代後半（15世紀半ば）以降に、明確に集落が形成されたことが確認できる。一方、遺跡としての富ノ森城跡では、平安時代後期に遺構が形成され始め、この時期の出土遺物として12～13世紀頃の播磨産軒瓦が確認できる。室町時代後半（15世紀）になると、この時期を境にして、集落の敷地が大型の溝によって区画されるようになる<sup>5)</sup>。特に、集落を縦断する道路沿いの敷地では短期間に複数回の整地が確認でき、土器の出土量も増加することから、この時期以降、人々の活動が顕著になることが想定できる。史料上の「富森」と、発掘調査で明らかになった集落は、この時期、対応するかの<sup>6)</sup>ような動きをみせる。

近世以降については、史料上の富森（本郷）は江戸時代後期までは集落が確認できるものの、枝郷の成立以降、史料に登場する頻度が減ることから、衰退していたことが想定される。一方の富ノ森城跡は、中世以来の大型の溝が引き続き利用されているが、建物はこれまでの調査では検出されていない。ここでも両者が対応するかの<sup>6)</sup>ような動きをみせる。

小結 今回、富森に関する史料を整理した。現状では、史料上の近世以前と以降の「富森」が同一の集落であるのか、あるいは史料上の「富森」と発掘調査で確認した集落が、同一の集落であるか、それを明らかにすることはできなかった。ただし、いずれも桂川左岸から巨椋池北岸にかけての近接した地域に位置することは確かである。今後の調査の進展により、その関係性が明らかになることを期待したい。

#### 註

- 1) 枝村とも。中世や近世に開発などによって新しく作られた村。もとからある村を本郷・元郷・親郷などといった。（日本史広辞典編集委員会 『日本史広辞典』 山川出版社 1997年 p.253 「枝郷」項）なお、出戸も枝郷のことを指す。
- 2) 吉田敬市「第2章 巨椋池の文化」『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区 1962年 p.103
- 3) 『寺院明細帳』によれば、覚念寺は慶安年間（1648～1652年）に調査地北側の横大路北ノ口町で中興され、天保14年（1843）に鳥羽街道沿いへと移転した。阿弥陀寺は昭和6年（1931）に横大路北ノ口町から鳥羽街道沿いへと移転した。
- 4) 『改正京町絵図細見大成』天保2年（1831）、ほか
- 5) 敷地が溝によって区画される集落は、「囲郭集落」「(中世)環濠集落」「集村」などと呼ばれることがあるが、定まった呼称がないことから、本報告では特定の用語を用いない。以下の文献を参考とした。長宗繁一「久我東町遺跡の主館」『平安京歴史研究 杉山信三先生米寿記念論集』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993年  
山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年  
『中世集落と灌漑』大和古中近研究会 1999年
- 6) 『寺院明細帳』の由緒によれば、阿弥陀寺の中興もこの頃（文安年間（1444～1449年））である。

## 付章2 基盤層（IX b層）堆積物の鉱物・砂粒分析

株式会社パレオ・ラボ

### （1）はじめに

京都市伏見区横大路六反畑他に所在する富ノ森城跡の調査で検出された堆積物について、淀水垂大下津町遺跡（松永ほか2023）の堆積物と比較し供給源となった河川の検討を行う目的で、鉱物分析・砂粒分析を行った。

### （2）試料と方法

分析試料は、本調査区（6区）の断割調査区（本報告 図版1）内で確認した基盤層（IX b層）から採取した1試料である（表3）。試料採取地点を図27・28と本報告の図7に示す。

分析は、鉱物分析および砂粒分析を行った。

試料は、50g程度を秤量した後、1φ（0.5mm）、2φ（0.25mm）、3φ（0.125mm）、4φ（0.063mm）の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。4φ篩残渣について、重液（テトラプロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物および重鉱物は、ガムクロラルを用いてプレパラートを作製し、偏光顕微鏡を用いて同定・計数を行った。軽鉱物については、町田・新井（2003）の火山ガラスの分類基準に従って、バブル型平板状（b1）、バブル型Y字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破碎型フレーク状（c1）、急冷破碎型塊状（c2）に分類した。重鉱物については、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）、不明（Opq）等を同定、計数した。

砂粒分析は、1φ残渣から大型礫を除き、エポキシ樹脂で固めて砂粒物の薄片を作製し、偏光顕微鏡を用いて複合石英類（深成岩類）、チャート、砂岩、泥岩、その他鉱物を同定、計数した。

表3 分析試料とその特徴

分析No.	採取地点	遺構/位置	層位	堆積物の特徴
No.1	本調査区(6区)	断割調査区	IXb層(基盤層)	灰黄褐色(10YR4/2)、礫混じり極粗粒～粗粒砂



図27 試料採取位置（北から）

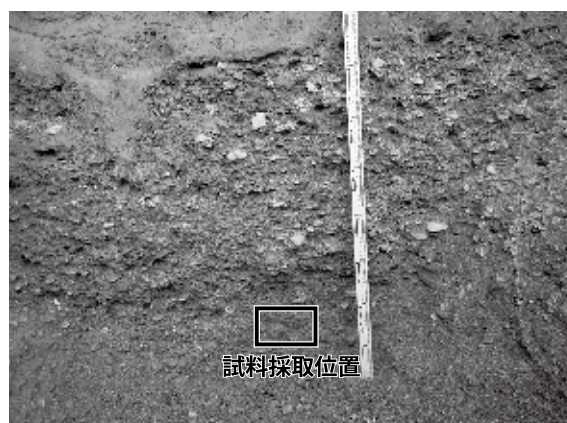


図28 試料採取層の堆積状況（北から）

### (3) 結果

試料は、灰黄褐色（10YR4/2）の礫混じり極粗粒～粗粒砂である。礫は3cm以下の細礫・中礫が多く、最大5cm程度の中礫を含む。篩分けでは、1φ篩残渣が特に多い（表4）。

軽鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、長石類（Fel）や石英（Qu）を含み、バブル型平板状ガラス（b1）や雲母類（Mi）を極少量含む（表5）。重鉱物では、不明粒子（Opq）が多く、次いで磁鉄鉱（Mg）が多く、角閃石（Ho）、斜方輝石（Opx）、ジルコン（Zr）、単斜輝石（Cpx）を含む（表6）。

1φ篩残渣中の2mm以下の砂粒薄片では、深成岩類と思われる複合石英類が60粒子、チャートが54粒子、泥岩が39粒子、砂岩が35粒子などであり、全体としては堆積岩類が多い（表7）。

### (4) 考察

淀水垂大下津町遺跡の堆積物の分析結果（株式会社パレオ・ラボ2023、pp78-83）によると、発掘調査区1区3層の試料（分析No.2）および現桂川河床の試料（分析No.4）は、砂粒分析において堆積岩類が多く、深成岩類を伴う砂粒組成を示し、鉱物では不明粒子が多く、角閃石をやや多く含み、輝石類、ジルコン、磁鉄鉱を伴なう。

今回分析を行った富ノ森城跡の基盤の礫質砂層は、堆積岩類が多く、深成岩類を伴う砂粒組成であり、鉱物では不明粒子が多く、次いで磁鉄鉱や角閃石をやや多く含み、輝石類やジルコンを伴なう。

表4 堆積物の粒度組成・重液分離の結果

分析No.	処理湿重(g)	砂粒分の粒度組成(重量g)				軽・重鉱物組成(重量g)	
		1φ	2φ	3φ	4φ	軽鉱物	重鉱物
No.1	50.29	36.23	9.37	1.57	0.22	0.02	0.01

表5 4φ篩残渣中の軽鉱物組成

分析No.	石英(Qu)	長石類(fel)	雲母類(Mi)	不明(Opq)	火山ガラス						ガラス合計	軽鉱物合計
					バブル(泡)型		軽石型		急冷破砕型			
					平板状(b1)	Y字状(b2)	繊維状(p1)	スポンジ状(p2)	フレーク状(c1)	塊状(c2)		
No.1	21	67	1	159	2						2	250

表6 4φ篩残渣中の重鉱物組成

分析No.	重鉱物						重鉱物合計
	斜方輝石(Opx)	単斜輝石(Cpx)	角閃石(Ho)	ジルコン(Zr)	磁鉄鉱(Mg)	不明(Opq)	
No.1	19	7	23	14	44	143	250

表7 1φ篩残渣中の岩石組成

分析No.	石英	長石類	雲母類	複合石英類	チャート	砂岩	泥岩	不明粒子	合計
No.1	12	19		60	54	35	39	1	220

以上の結果から、富ノ森城跡において分析を行った礫質砂層は、現桂川河床の砂礫および淀水垂大下津町遺跡1区3層の砂礫層と類似する。よって、礫質砂層は、桂川に由来する可能性が高いと考えられる。

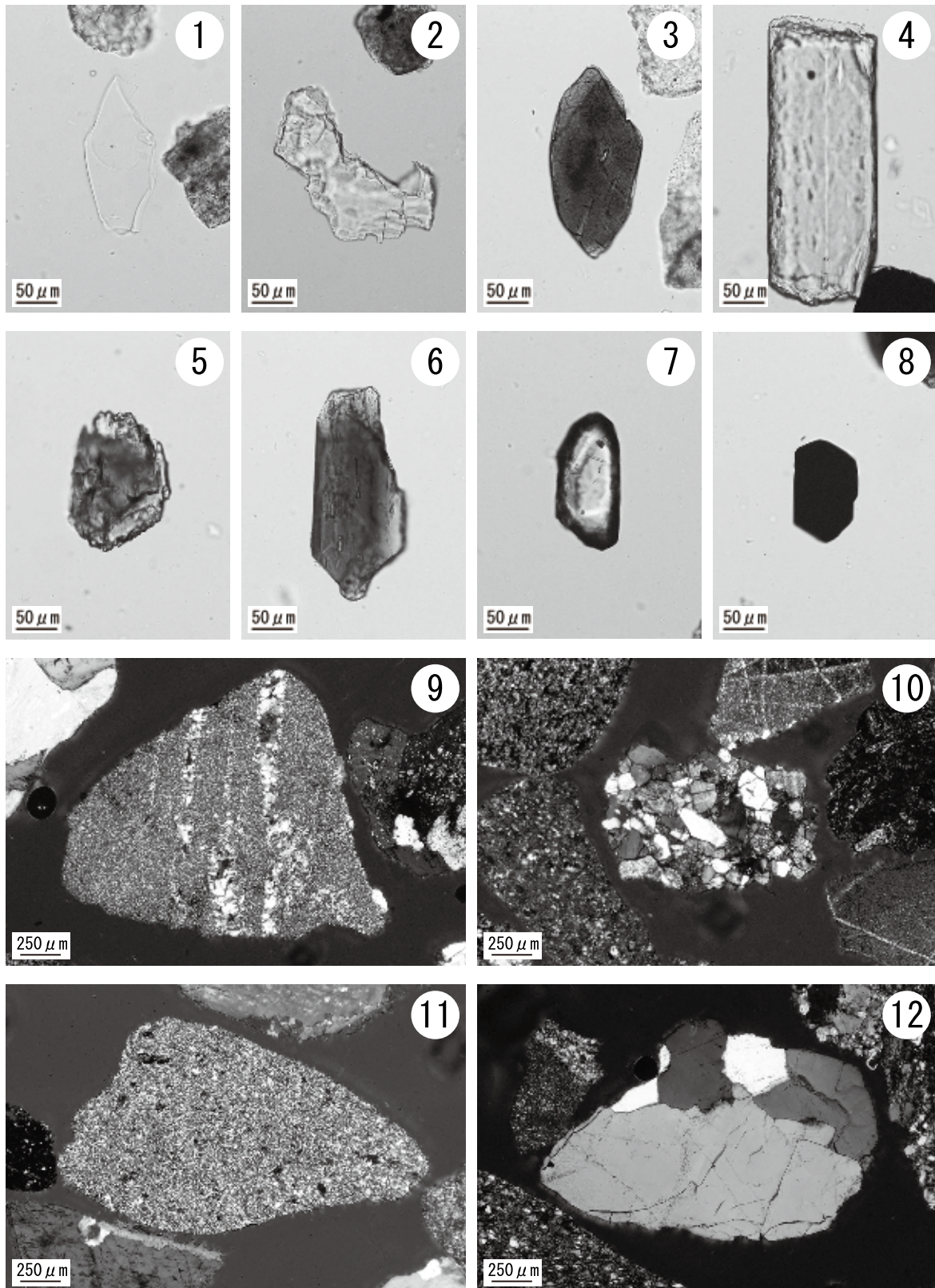
(藤根 久・米田恭子・高木康裕)

#### 引用文献

株式会社パレオ・ラボ「付章 自然科学分析」『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所  
発掘調査報告2021-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023年 pp53-83

町田洋・新井房夫『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 2003年 p.336

松永修平・柏田有香・中谷正和『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
2021-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023年



1. バブル型平板状ガラス 2. 長石類 3. 雲母類 4. 斜方輝石 5. 単斜輝石  
 6. 角閃石 7. ジルコン 8. 磁鉄鉱 9. チャート 10. 砂岩 11. 泥岩 12. 複合石英類

図29 分析試料中の鉱物・岩石の顕微鏡写真



付表1 土器観察表

( ) は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
1	須恵器	杯	IXb層				N6/0	長石	
2	灰釉陶器	壺	IXb層				胎:7.5Y8/1 釉:5Y5/3	長石	体部下半。内面は当て具痕、 降灰、外面はケズリ、施釉
3	弥生土器	壺	溝120-I				2.5Y7/3	長石、石英、チャート	口縁部～頸部
4	須恵器	短頸壺	溝120-I				内外:10Y5/1 断:7.5Y5/3	長石、赤色粒	頸部。外面は平行タタキ、カキ 目、内面は同心円文当て具痕
5	須恵器	杯蓋	溝120-I				5Y6/1	長石、黒色粒	口縁部
6	灰釉陶器	壺	溝120-I				胎:5Y7/1 釉:5Y5/3	長石	体部下半～底部。体部外面下 半はケズリ、底部内面は降灰
7	須恵器	鉢	第2面 検出				N6/0	長石	東播系 口縁部～体部。片口部の破片
8	須恵器	甕	第2面 掘り下げ		(4.3)		N6/0		亀山か
9	土師器	皿	落込151	6.9	1.7		10YR8/2	長石、石英	
10	土師器	皿	落込151	9.7	1.6		10YR7/3	長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
11	土師器	皿	落込151	9.9	1.6		7.5YR7/4	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
12	土師器	皿	落込151	10.2	(1.7)		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
13	土師器	皿	落込151	11.3	2.7		10YR8/3	長石、石英	
14	土師器	皿	落込151	12.5	(2.7)		10YR8/2	チャート	
15	土師器	皿	土坑173	8.1	(1.2)		10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
16	土師器	皿	土坑173	8.2	1.2		7.5YR7/4	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
17	土師器	皿	土坑173	8.3	1.1		7.5YR7/4	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
18	土師器	皿	土坑173	11.8	(2.0)		10YR7/3	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
19	土師器	皿	土坑173	11.4	2.2		7.5YR7/2	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形 口縁部に煤付着
20	土師器	皿	落込174		(1.7)		5YR6/4	長石、チャート、雲母	乙訓在地形か
21	土師器	皿	落込174	11.4	(2.0)		7.5YR8/2	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
22	瓦質土器	椀	落込174	13.4	4.2	4.8	N4/0	長石、石英、黒色粒	
23	瓦質土器	鍋	落込174		(5.8)		10YR7/1	長石、石英、チャート、 黒色粒	体部外面に煤付着
24	瓦質土器	羽釜	落込174	30.4	(23.8)		内:7.5YR6/2 外:N5/0	長石、石英、チャート	体部外面に煤付着
25	土師器	皿	溝120-II	6.3	(1.3)		10YR7/3	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
26	土師器	皿	溝120-II	6.6	1.3		7.5YR7/4	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形
27	土師器	皿	溝120-II	6.7	1.3		7.5YR7/4	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形
28	土師器	皿	溝120-II	6.8	1.5		10YR7/1	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形
29	土師器	皿	溝120-II	7.0	1.4		10YR8/3	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形
30	土師器	皿	溝120-II	7.7	1.6		10YR7/3	石英、雲母、赤色粒	乙訓在地形
31	土師器	皿	溝120-II	9.3	2.4		10YR8/1	チャート、雲母、 赤色粒	乙訓在地形

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
32	土師器	皿	溝120-II	9.7	2.0		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
33	瓦質土器	羽釜	溝120-II		(4.3)		7.5YR7/4	長石、石英、チャート	体部外面に煤付着
34	瓦質土器	羽釜	溝120-II	24.2	(14.0)	20.5	内:N8/0 外:10YR7/2	長石、石英、チャート	体部外面に煤付着
35	瓦質土器	羽釜	溝120-II	31.5	(13.5)		N5/0	長石、石英、チャート	
36	瓦質土器	甕	溝120-II		(10.2)		内:2.5Y5/1 外:N3/0	長石、石英、チャート	
37	土師器	皿	溝170-I	6.8	1.3		7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
38	土師器	皿	溝170-I	11.8	(1.7)		10YR8/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
39	土師器	皿	溝170-I	11.5	2.1		10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、黒色粒、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
40	土師器	皿	溝175	6.9	(1.6)		7.5YR7/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
41	土師器	皿	溝175		(2.0)		10YR8/2	長石、石英、チャート、 黒色粒、雲母、赤色粒	乙訓在地形
42	土師器	皿	溝175		(2.2)		10YR7/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
43	輸入青磁	皿	溝175	8.8	2.4		胎:N9/1 釉:2.5GY6/1		
44	土師器	皿	溝120-I	6.5	1.4		2.5Y7/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
45	土師器	皿	溝120-I	6.7	1.6		10YR8/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
46	土師器	皿	溝120-I	6.8	1.3		7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 雲母、黒色粒、赤色粒	乙訓在地形
47	土師器	皿	溝120-I	6.8	1.5		7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
48	土師器	皿	溝120-I	7.3	1.3		7.5YR7/3	長石、石英、チャート、 雲母、黒色粒、赤色粒	乙訓在地形
49	土師器	皿	溝120-I	9.5	2.1		5YR7/6	長石、石英、チャート、 雲母、黒色粒、赤色粒	乙訓在地形
50	土師器	皿	溝120-I	9.7	2.0		7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 雲母、黒色粒、赤色粒	乙訓在地形
51	土師器	皿	溝120-I	10.2	1.9		10YR8/3	石英、チャート、雲母、 黒色粒、赤色粒	乙訓在地形
52	土師器	皿	溝120-I	14.3	2.5		10YR7/2	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
53	土師器	皿	溝120-I	20.2	(3.3)		7.5YR7/3	長石、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形 体部外面に煤付着
54	瓦質土器	鍋	溝120-I		(2.7)		7.5YR6/3	長石、石英、雲母、 黒色粒	
55	瓦質土器	羽釜	溝120-I	19.7	(10.0)		N6/0	長石、石英、黒色粒	体部外面に煤付着
56	瓦質土器	羽釜	溝120-I	11.2	(11.7)		10YR7/2	長石、石英、チャート、 黒色粒子	体部外面に煤付着
57	焼締陶器	鉢	溝120-I		(4.8)		7.5YR7/4	長石、石英、チャート	
58	施釉陶器	椀	溝120-I	15.9	6.0	4.8	胎:2.5Y7/1 釉:2.5Y6/4	長石、石英、黒色粒	
59	輸入白磁	皿	溝120-I	9.5	2.6	4.1	胎:10YR8/2 釉:10YR8/1	長石	
60	土師器	皿	土坑148	8.6	1.7		5YR6/4	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒	乙訓在地形
61	焼締陶器	甕	土坑148		(9.1)		内外:5YR4/2 断:5Y6/1	長石、石英、チャート	
62	輸入青磁	椀	土坑87		(4.8)	0.0	胎:N9/1 釉:5GY7/1		高台内釉剥ぎ

( )は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
63	輸入白磁	椀	土坑148				胎:10Y8/1 釉:5Y7/2	黒色粒、白色粒	広東省系。口縁部外反、体部外面に刻劃文
64	輸入白磁	椀	第2面掘り下げ				胎:10Y8/1 釉:5Y7/2	黒色粒、白色粒	体部外面下半は露胎
65	輸入白磁	皿	土坑90				胎:10Y8/1 釉:5G7/1	黒色粒	体部内面に型文
66	輸入白磁	杯	溝10		(2.1)	3.1	胎:2.5Y8/2 釉:2.5Y8/1		
67	輸入白磁	皿	第2面掘り下げ	8.6	2.4	4.5	胎:2.5Y8/2 釉:2.5Y8/1	黒色粒多量	高台挟り込み・内面体部重ね焼き痕4方、高台内施釉
68	輸入白磁	皿	第2面掘り下げ	10.9	2.4	4.5	胎:N9/0 釉:2.5Y8/1		高台挟り込み・内面体部重ね焼き痕推定4方、高台内露胎
69	輸入青磁	椀	井戸122掘形		(2.0)	5.8	胎:2.5Y7/1 釉:5Y5/2		越州窯系。高台端部・内面底部に目跡、輪状高台
70	輸入青磁	皿	溝120-II		(1.2)	5.0	胎:N6/0 釉:10Y6/2		同安窯系。内面底部に点綴文平底、底部露胎
71	輸入青磁	椀	溝120-II				胎:5Y7/1 釉:5Y5/4		龍泉窯系。口縁部～体部。立体的な鎊連弁文、間弁なし
72	輸入青磁	皿	第1面掘り下げ	11.3	3.5	5.9	胎:N7/0 釉:5GY7/1		基筒底
73	輸入青磁	椀	溝1				胎:N6/0 釉:5GY5/1	黒色粒、白色粒	体部の破片 外面に細い線刻連弁文
74	輸入青磁	椀	第2面掘り下げ				胎:N6/0 釉:5Y5/3		口縁部～体部の破片 外面口縁部に雷文
75	輸入青磁	椀	土坑14		(4.0)	5.2	胎:N8/0 釉:10Y6/2		高台施釉、高台内露胎 底部内面に型文
76	輸入青磁	椀	第2面掘り下げ		(2.4)	5.1	胎:N5/0 釉:5GY6/1	白色粒	高台内露胎 底部内面に型文
77	輸入青磁	椀	第2面掘り下げ		(5.4)	5.9	胎:N8/0 釉:10GY8/1		高台内釉剥ぎ。外面体部の一部釉が発泡、2次被熱か

付表2 瓦類観察表

No.	種類	遺構名	文様	成形技法等	備考
瓦1	軒丸瓦	第2面掘り下げ	複弁六弁蓮華文	瓦当は、裏面全体に不定方向のナデ。丸瓦部凸面は、瓦当から玉縁にかけて一定方向のナデ 焼成は須恵質	神出窯跡群宮ノ裏支群NM107・NM109、同窯跡群釜ノ口支群NM207・NM208、同窯跡群垣内支群NM7、林崎三本松瓦窯NM18A・NM18B、魚橋瓦窯と同文(ただし、間弁の形状など相違点あり)。消費地では、京都府の平安宮朝堂院、鳥羽離宮金剛心院、成勝寺、浄瑠璃寺、兵庫県の上津田中遺跡、本町遺跡で同文の出土例あり。※1
瓦2	丸瓦	第2面掘り下げ		凹面ナデ、凸面無文 焼成は須恵質	
瓦3	平瓦	土坑148		凹面布目。凸面は斜格子と条線を組み合わせたタタキ、離れ砂多量に付着。 釘穴あり	

※1

[神出窯跡群]:『神出窯跡群-神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1995年、

『神出窯跡群発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2018年

[林崎三本松瓦窯]:『林崎三本松瓦窯跡群』明石市教育委員会 2017年

[魚橋瓦窯]:今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 1980年

[平安宮朝堂院]:『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年

[鳥羽離宮金剛心院]:『鳥羽離宮Ⅰ 金剛心院跡の調査』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年

[成勝寺]:『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年

[浄瑠璃寺]:庭園文化研究所『浄瑠璃寺庭園環境整備事業報告書』浄瑠璃寺 1977年

[上津田中遺跡]:『上津田中遺跡 第4分冊(辻ヶ内・居住地区の調査)』兵庫県教育委員会 1995年

[本町遺跡]:今里幾次「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡』姫路市教育委員会 1984年

付表3 石製品観察表

( )は残存値

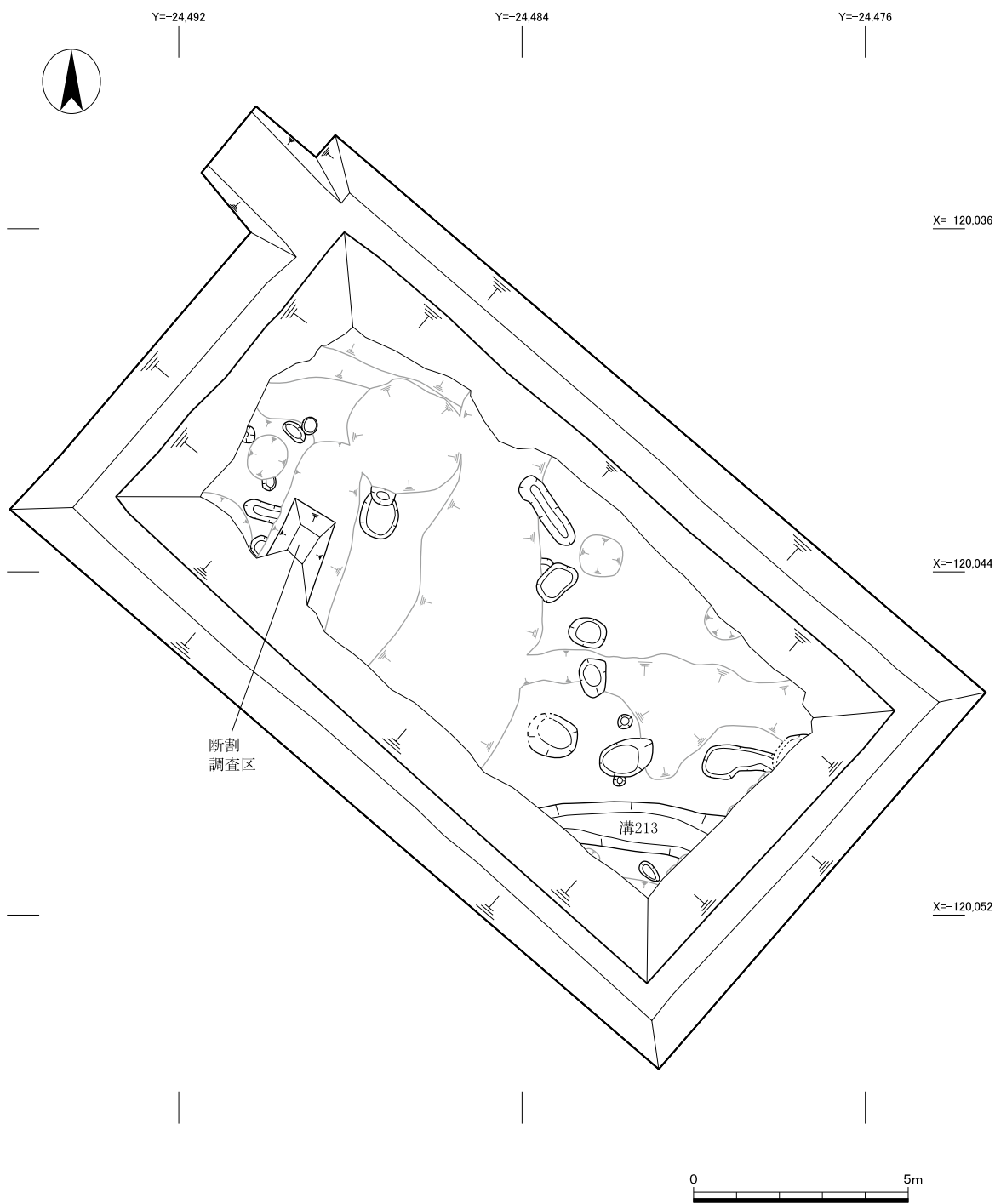
No.	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
石1	石鍋	土坑148	(5.9)	(8.5)	(0.9~1.7)	(127)	滑石	

付表4 金属製品観察表

No.	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
銭1	皇宋通寶	第2面 掘り下げ	2.5	2.5	0.1	2.342	初鑄年:1039
銭2	永樂通寶	溝170-I	2.5	2.5	1.5	2.588	初鑄年:1411

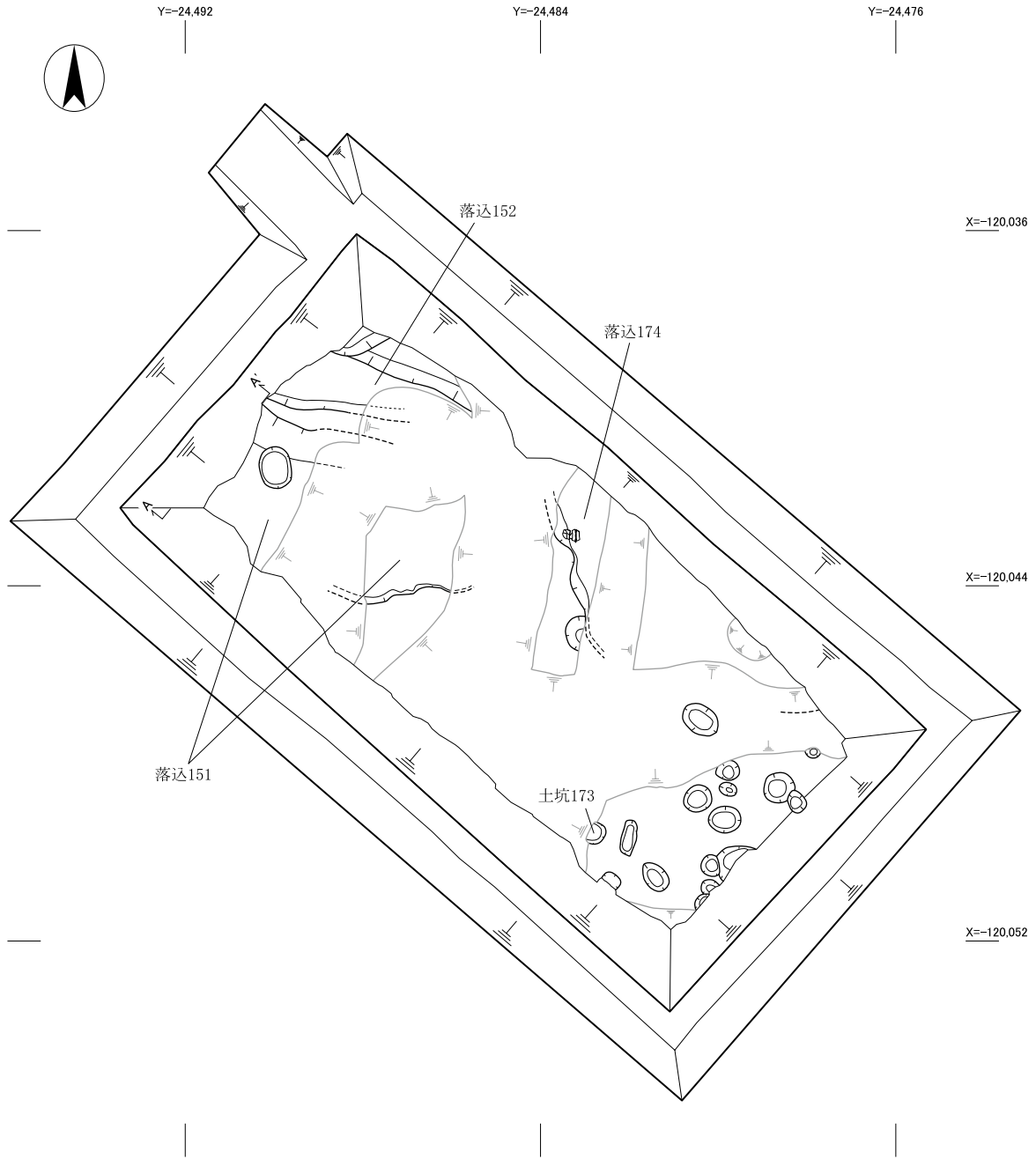
# 圖 版





第4面（鎌倉時代中葉から後葉）遺構平面図（1：150）

図版2  
遺構

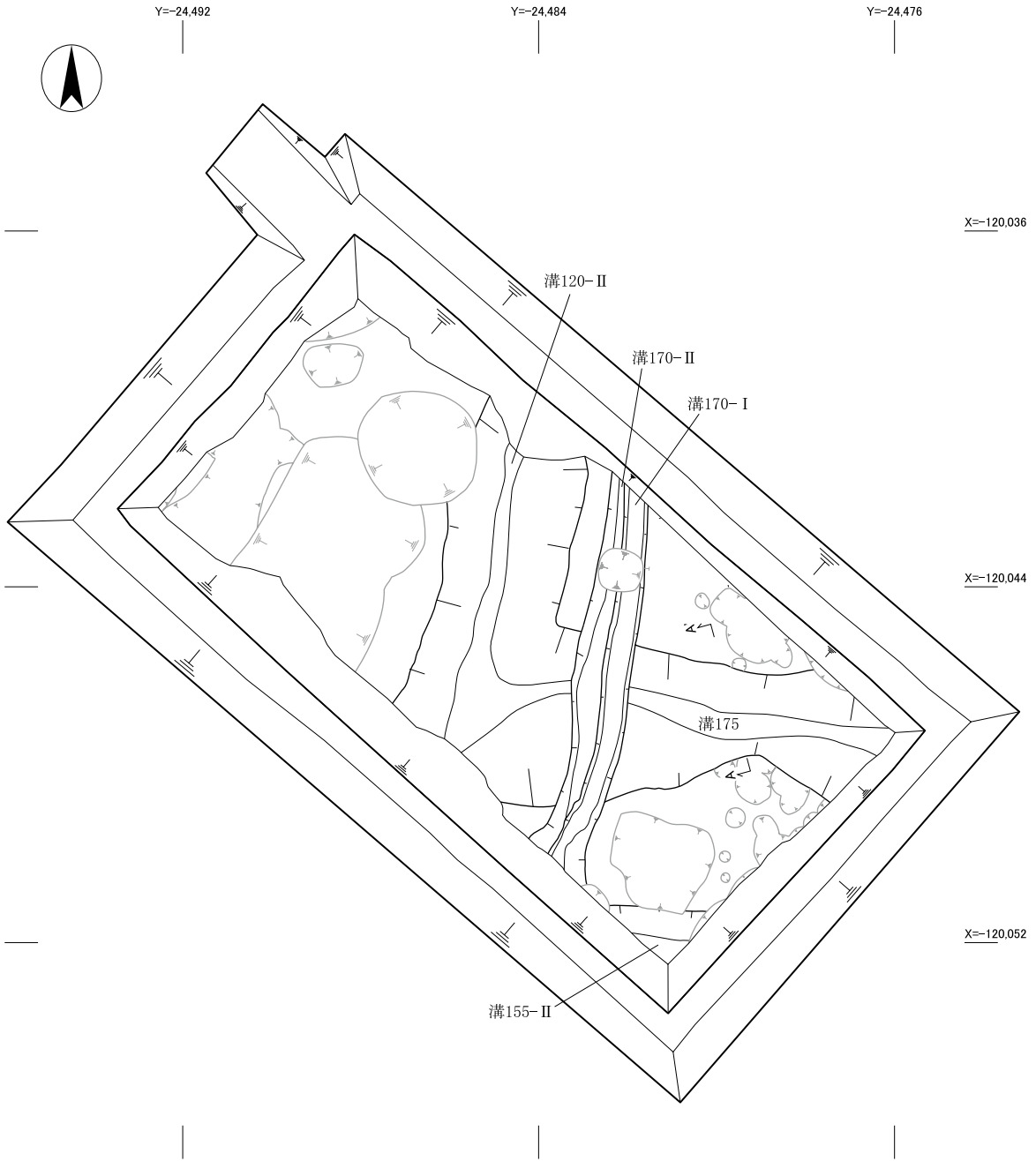


※ A-A'は図8に対応



第3面（鎌倉時代末から室町時代前半）遺構平面図（1：150）



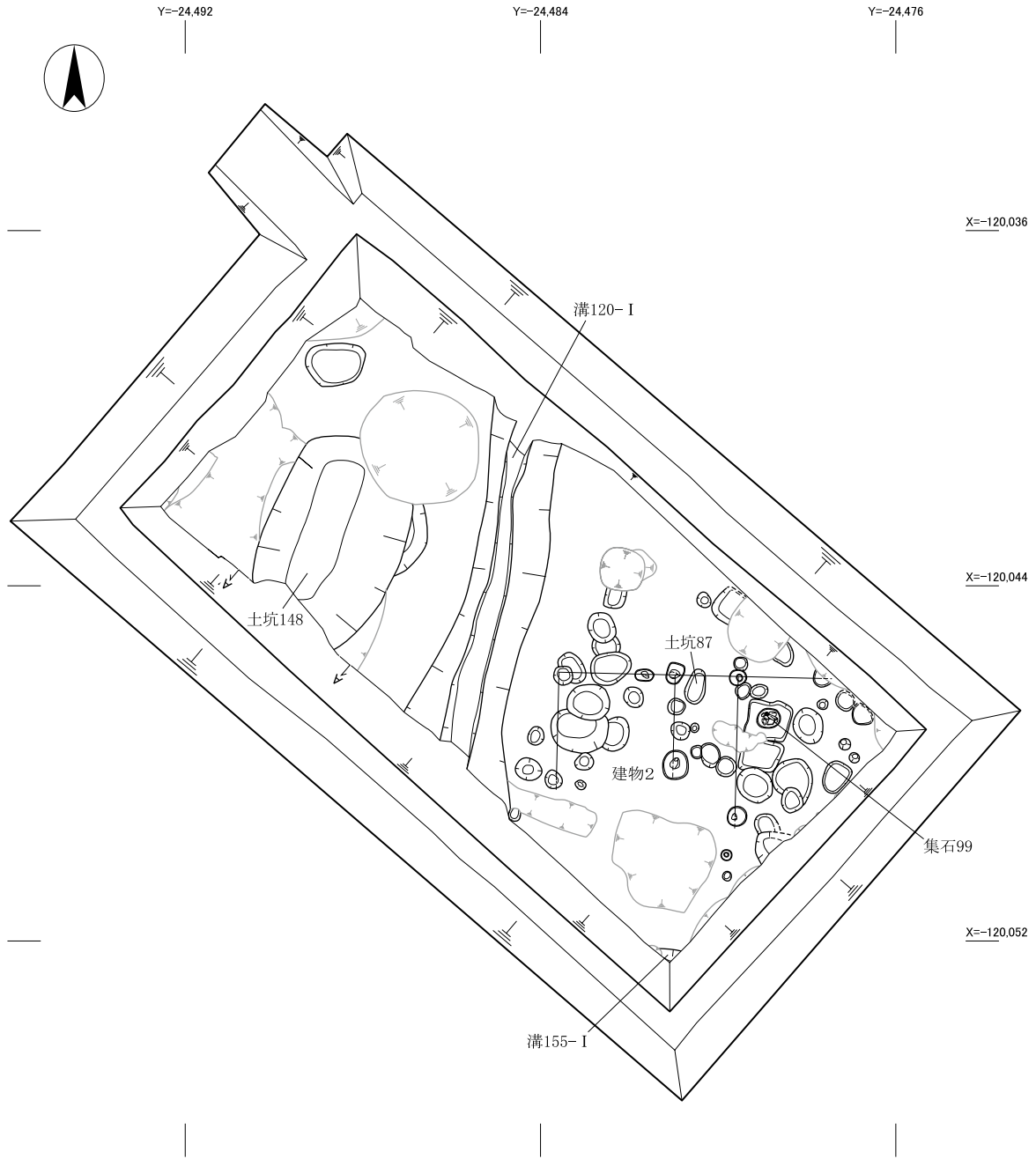


※ A-A' は図10に対応



第2面 b 期（室町時代後半）遺構平面図（1 : 150）

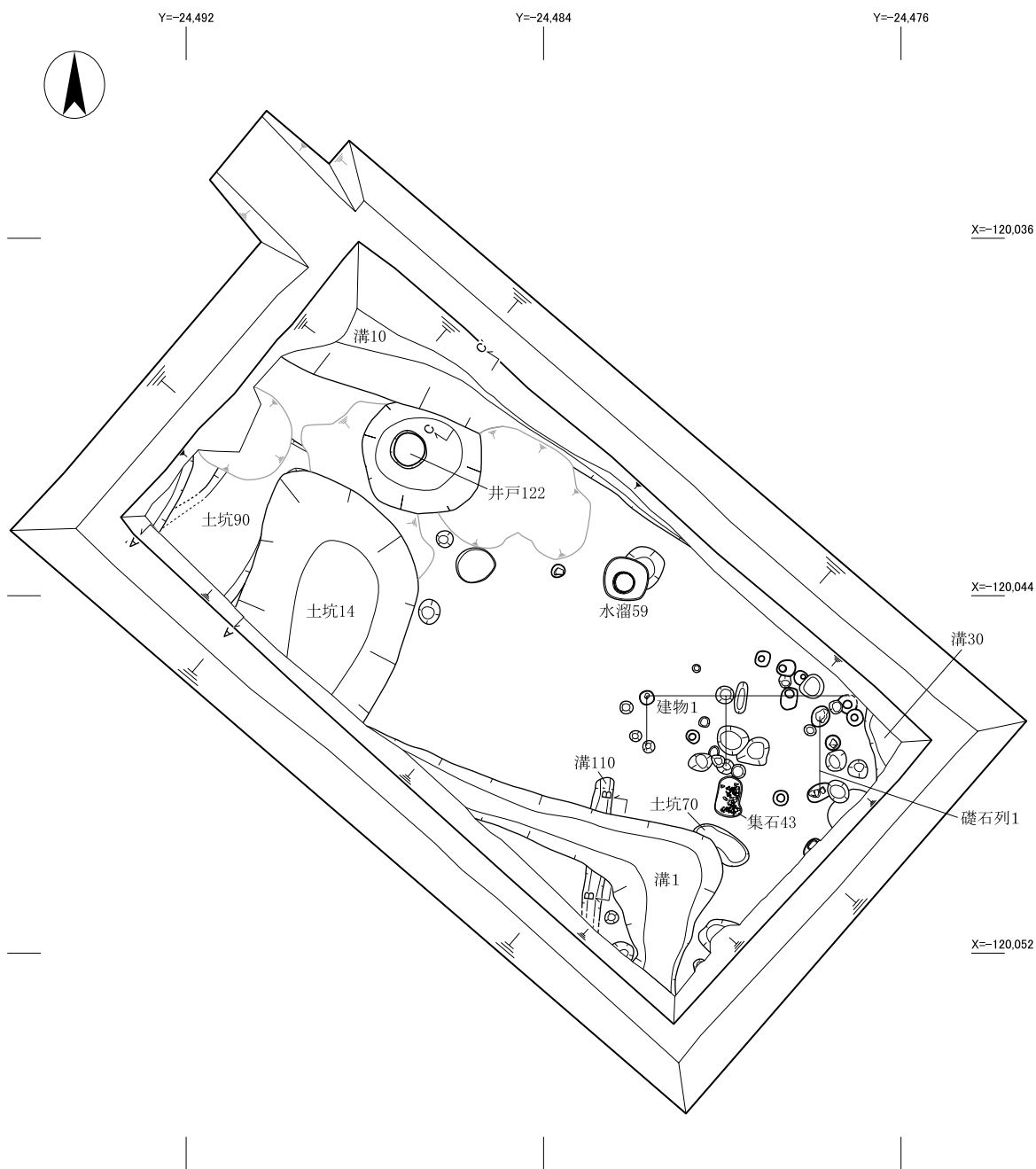
図版4  
遺構



※ A-A'は図版9に対応



第2面a期（室町時代後半）遺構平面図（1：150）

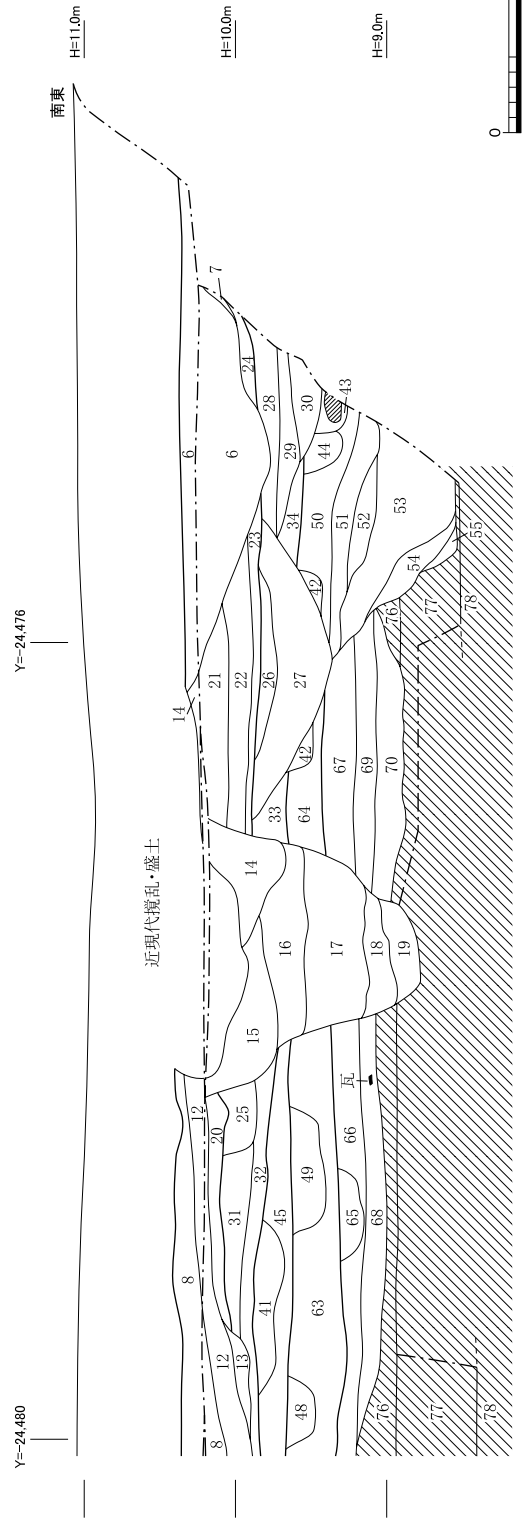
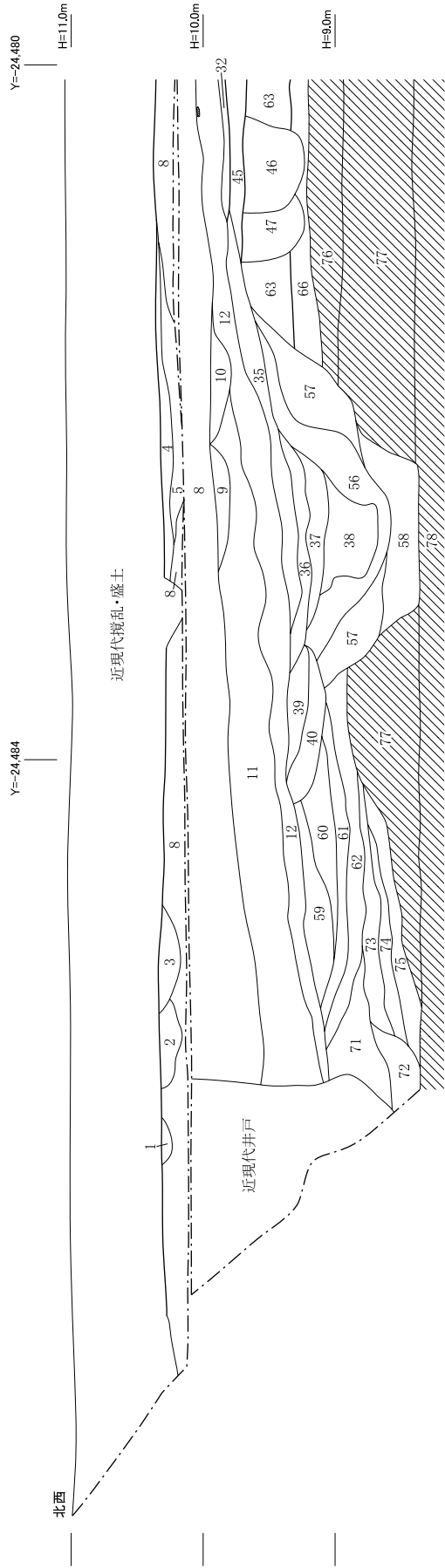


※ A-A'は図版10、B-B'・C-C'は図11に対応



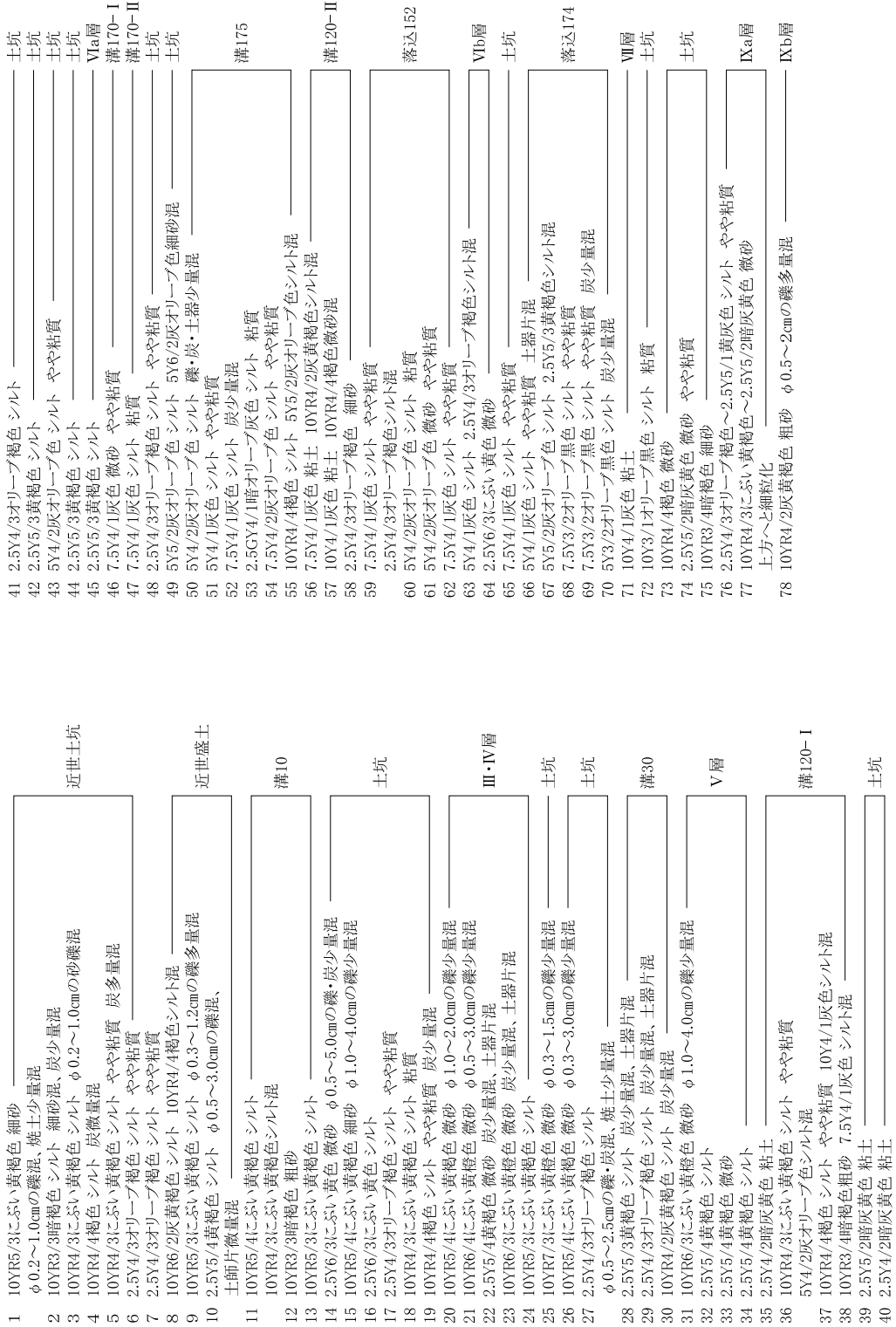
第1面（安土桃山時代から江戸時代）遺構平面図（1：150）

図版 6  
遺構

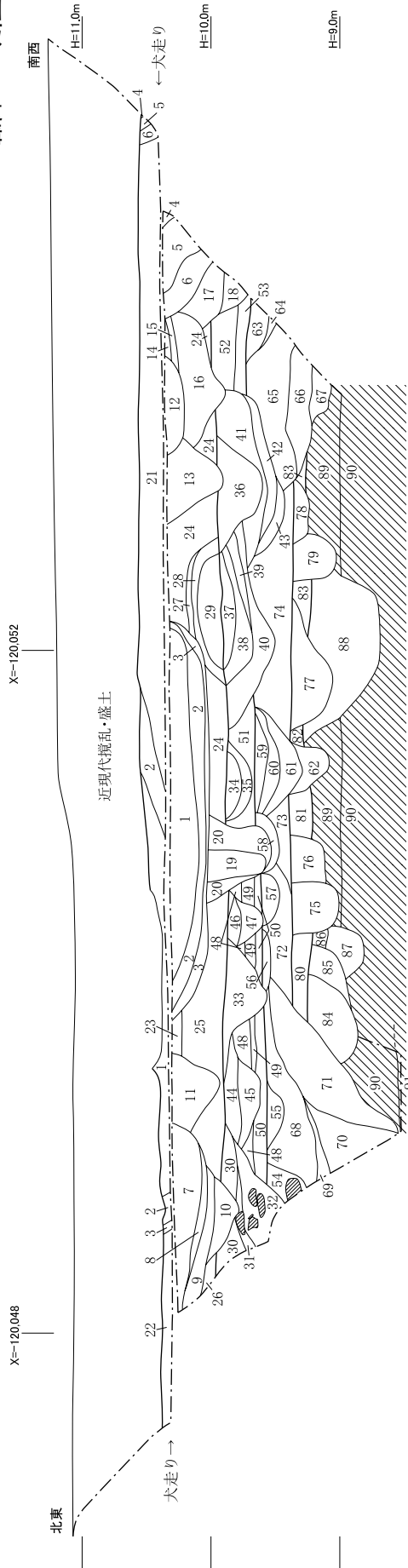


調査区北壁断面図1 (1 : 50)

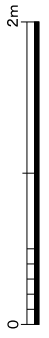
調査区北壁断面図2 (土層名)



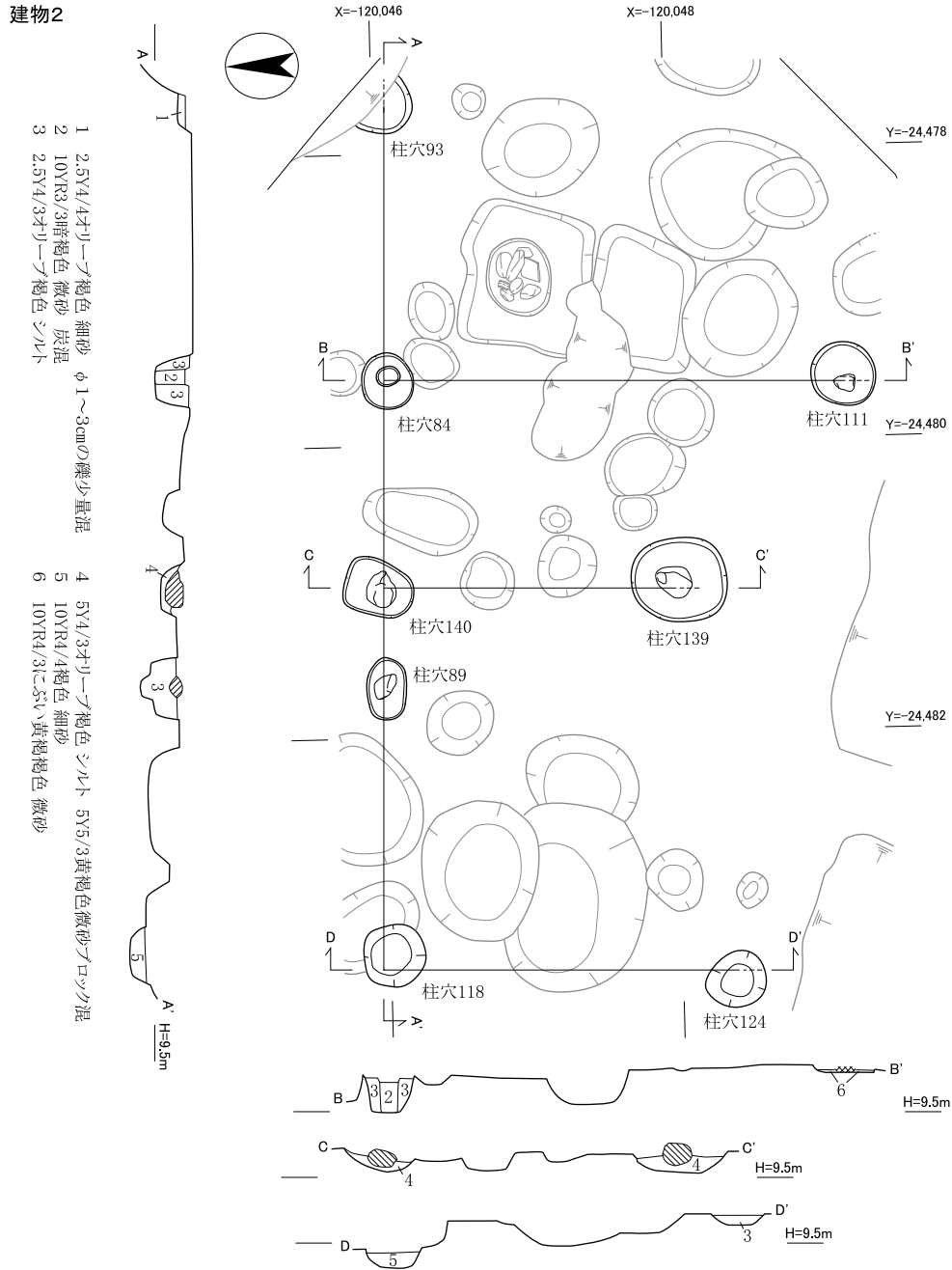
図版 8 遺構



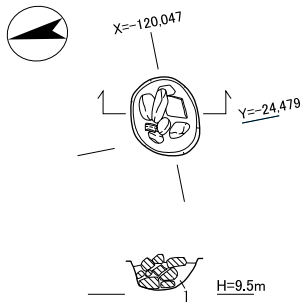
1	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	10YR5/6黄褐色シルト	33	10YR5/6黄褐色シルト	土坑	65	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	炭少量混
2	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	34	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	土坑	66	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	溝155-II	
3	2.5Y5/3黄褐色シルト	35	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	炭少量混	67	5Y4/2灰オリーブ色シルト	土坑	
4	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	36	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	炭少量混	68	5Y4/2灰オリーブ色シルト	礫・炭・土器少量混	
5	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	37	2.5YR4/4オリーブ褐色シルト	炭少量混	69	5Y4/1灰色シルト	やや粘質	
6	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	38	2.5YR5/4黄褐色シルト	土坑	70	2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト	粘質	
7	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	39	2.5YR5/3黄褐色シルト	土坑	71	5Y4/1灰色シルト	粘質	
8	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	40	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	炭少量混	72	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	土坑	
9	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	41	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	礫少量混	73	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	VI層	
10	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	42	2.5Y5/4黄褐色シルト	やや粘質	74	2.5YR5/3黄褐色シルト	土器片混	
11	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	43	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	土坑	75	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土坑	
12	10YR5/2暗灰黄色シルト	44	5Y4/2灰オリーブ色シルト	土坑	76	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	土坑	
13	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	45	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	炭少量混	77	5Y4/2灰オリーブ褐色シルト	やや粘質	
14	10YR6/4にぶい黄褐色シルト	46	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	炭少量混	78	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	やや粘質	
15	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	47	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	炭少量混	79	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	土器片混	
16	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	48	2.5Y5/3黄褐色シルト	土器片混	80	5Y4/3暗オリーブ色シルト	土坑	
17	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	49	2.5Y5/4黄褐色シルト	土坑	81	2.5Y5/3黄褐色シルト	やや粘質	
18	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	50	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	炭少量混	82	2.5YR4/3オリーブ褐色シルト	土坑	
19	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	51	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	炭少量混	83	2.5Y5/4黄褐色シルト	土坑	
20	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	52	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	炭少量混	84	2.5Y5/3黄褐色シルト	土坑	
21	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	53	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	炭少量混	85	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土坑	
22	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	54	5Y4/2灰オリーブ色シルト	やや粘質	86	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	土坑	
23	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	55	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土器少量混	87	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	土坑	
24	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	56	5Y5/2暗オリーブ色シルト	土坑	88	2.5YR5/6黄褐色シルト	溝213	
25	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	57	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	やや粘質	89	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	IXa層	
26	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	58	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	土坑	90	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	IXb層	
27	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	59	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	土坑	91	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	上方へど細粒化	
28	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	60	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	土坑			粗砂 φ0.5~2cmの礫多量混	
29	2.5Y4/4オリーブ褐色シルト	61	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	土坑				
30	2.5Y5/3黄褐色シルト	62	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	炭少量混				
31	2.5Y5/4黄褐色シルト	63	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	炭少量混				
32	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	64	2.5Y4/3オリーブ褐色シルト	溝155-I				



調査区東壁断面図 (1 : 50)



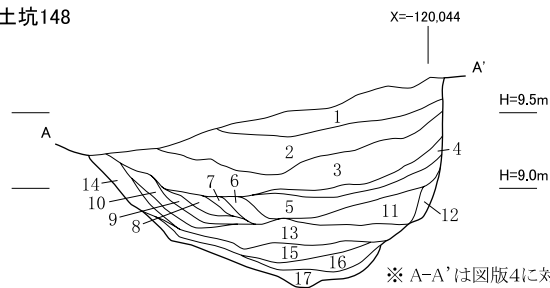
集石99



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト  
 φ10~25cmの礫多量混 炭少量混

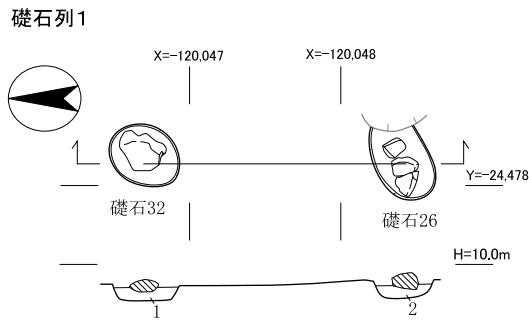
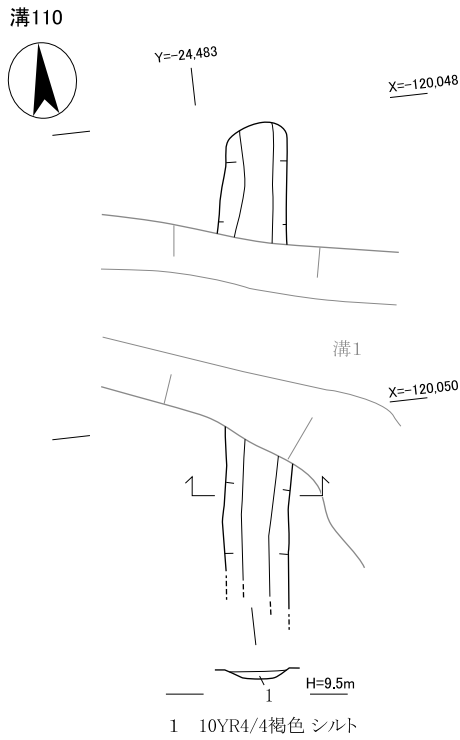


土坑148

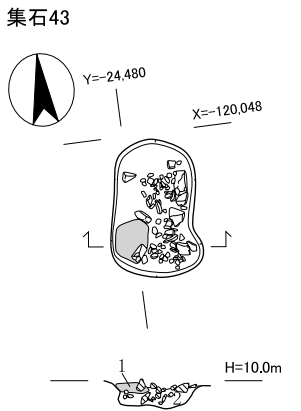


- |                   |                                  |
|-------------------|----------------------------------|
| 1 2.5Y5/3黄褐色 粘土   | 10 5Y4/1灰色 粘土                    |
| 2 2.5Y5/3黄褐色 粘土   | 11 5Y4/1灰色 シルト                   |
| 3 5Y5/2灰オリーブ色 シルト | 12 5Y5/2灰オリーブ色 シルト やや粘質          |
| 4 5Y4/1灰色 シルト     | 13 5Y5/1灰色 粘土 細砂ブロック・φ0.5~4cmの礫混 |
| 5 10Y3/1オリーブ黒色 粘土 | 14 5Y4/1灰色 粘土 シルト混               |
| 6 5Y4/2灰オリーブ色 微砂  | 15 5Y5/1灰色 細砂                    |
| 7 10Y3/1オリーブ黒色 粘土 | 16 5Y5/2灰オリーブ色 細砂                |
| 8 5Y4/2灰オリーブ色 微砂  | 17 5Y4/1灰色 粘土                    |
| 9 5Y4/1灰色 シルト     |                                  |

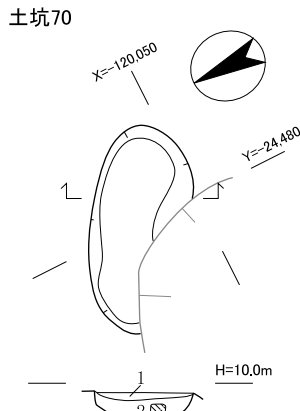
建物2・集石99実測図、土坑148断面図 (1:50)



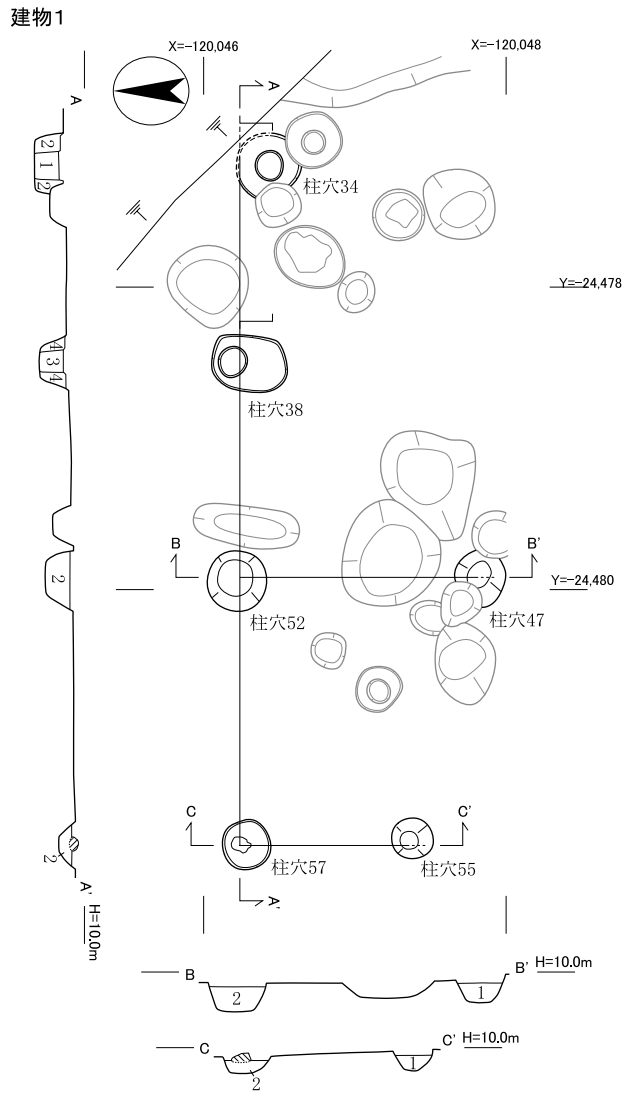
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 焼土少量  
φ0.5cm程度の灰色シルトブロック混
- 2 10YR4/4灰黄褐色シルト 焼土・炭少量  
φ0.5cm程度の灰色シルトブロック混



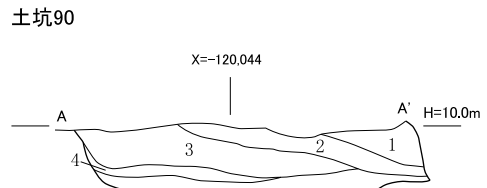
- 1 10YR4/2灰黄褐色シルト(土塊)
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト  
焼土・炭・土器片混



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂  
焼土・炭少量混
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色シルト  
焼土・炭・土器片少量混



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 やや粘質 炭少量混
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂 やや粘質 焼土・炭少量混
- 3 2.5Y3/2黒褐色シルト 焼土・炭混
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 微砂 やや粘質  
φ1~3cmの礫少量混、炭・焼土少量混



※ A-A' は図版5に対応

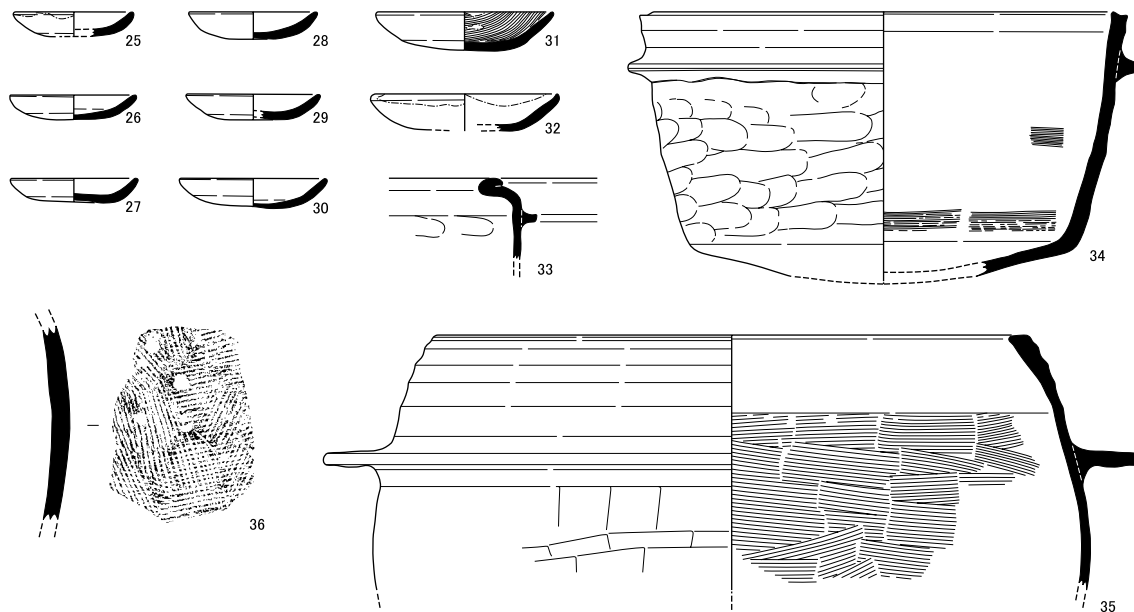
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 炭・φ2~5cm礫少量混
- 2 2.5Y5/3黄褐色シルト
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色シルト やや粘質  
φ2cm程度の礫少量混
- 4 2.5Y5/3黄褐色シルト やや粘質
- 5 2.5Y5/1黄灰色シルト やや粘質  
φ0.5cm程度の礫少量混



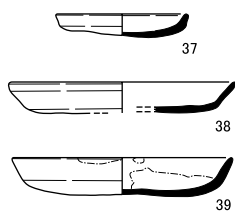
溝110・建物1・礎石列1・集石43・土坑70実測図、土坑90断面図(1:50)



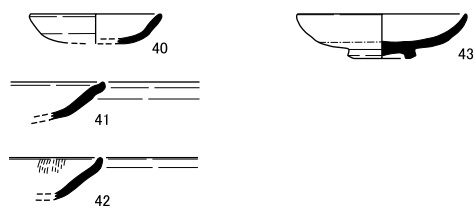
溝120-II



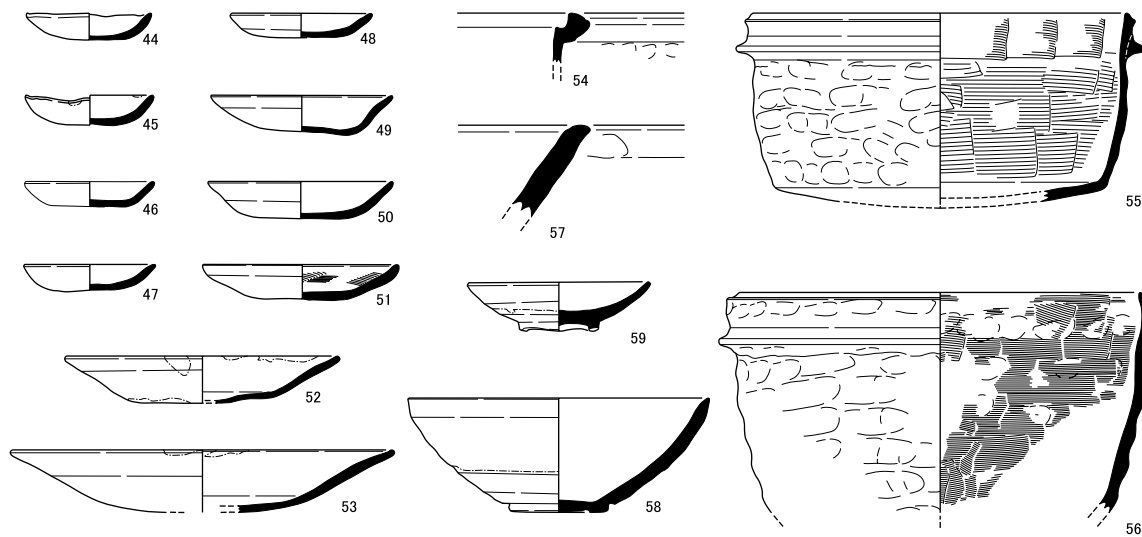
溝170-I



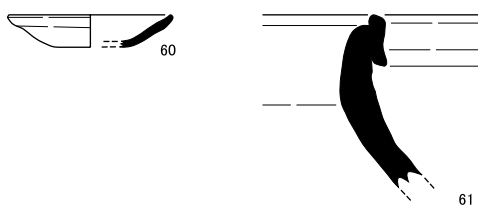
溝175



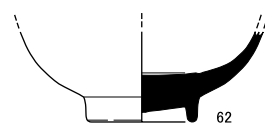
溝120-I



土坑148



土坑87



溝120-II · 170-I · 175 · 120-I、土坑148 · 87出土土器実測図 (1 : 4)



1 第4面全景（北西から）



2 溝213（西から）



1 第3面全景（北西から）



2 溝175断面（東から）



1 第2面全景（北西から）



2 溝120-II（北から）



1 調査区東半 建物2、柱穴群（北から）



2 建物2 柱穴139・140（南から）



3 建物2 柱穴140半裁（西から）



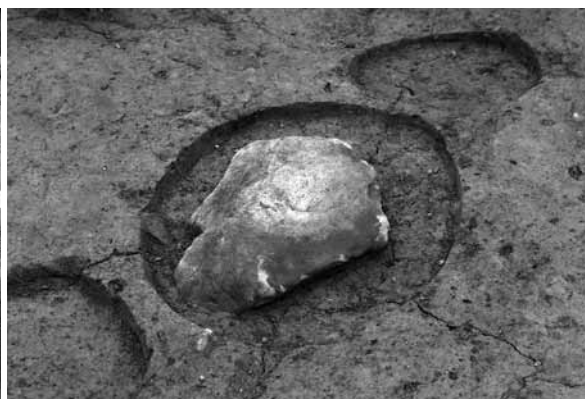
4 集石99半裁（西から）



1 第1面全景（北西から）



2 調査区東半 建物1、礎石列1、柱穴群（西から）



3 礎石列1 礎石32（北東から）



4 集石43（西から）



1 溝10 (西から)



2 溝1 (西から)



3 井戸122 (北から)



4 井戸122半裁 (西から)



5 水溜59 (南から)

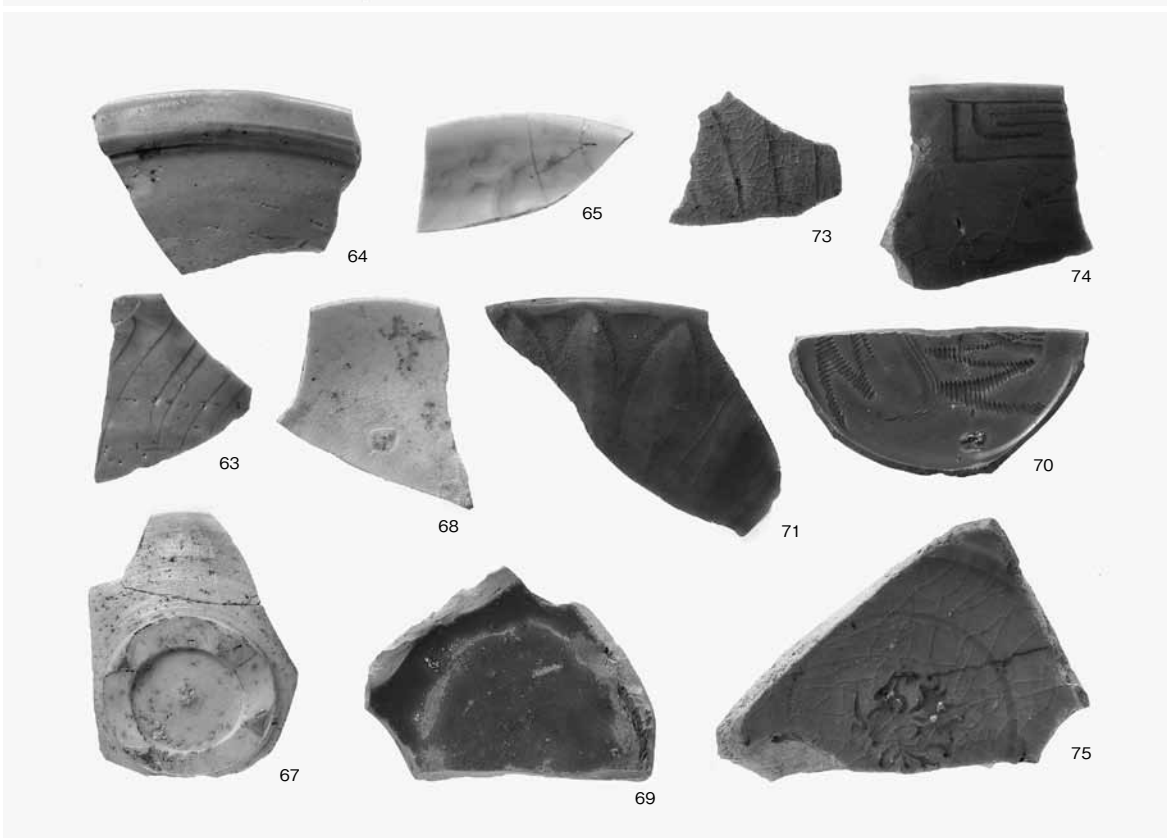
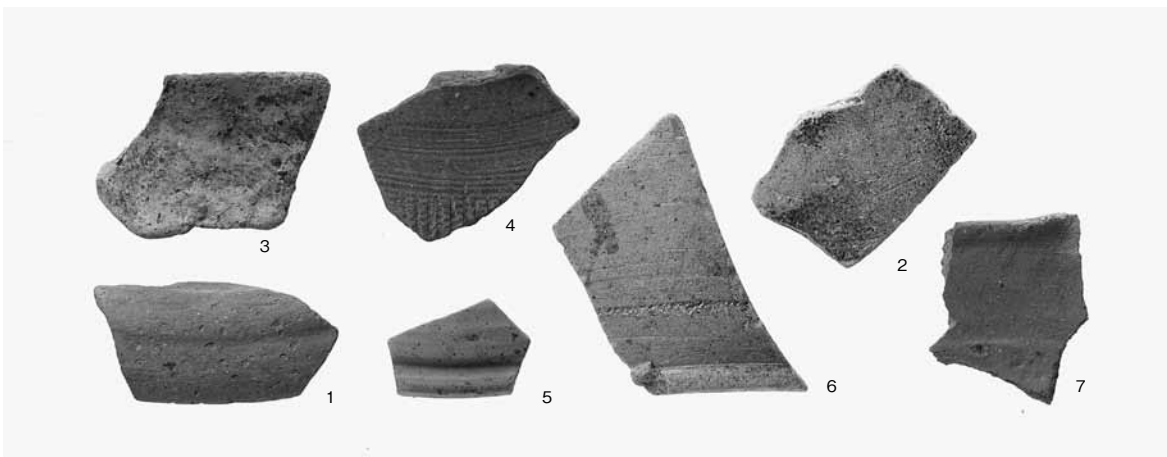


6 水溜59半裁 (南から)



沟120 - II · 120 - I 出土土器





その他出土土器・輸入陶磁器、瓦

# 報告書抄録

ふりがな	とみのもりじょうあと							
書名	富ノ森城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2023-2							
編著者名	中谷俊哉							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2024年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみのもりじょうあと 富ノ森城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よこおおじろくたんはた 横大路六反畑 ちない 地内	26100	1189	34度 55分 03秒	135度 43分 55秒	2023年4月 6日～2023 年6月23日	234m <sup>2</sup>	土地区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
富ノ森城跡	平城跡	平安時代		輸入陶磁器、瓦類		鎌倉時代から安土 桃山時代の集落を 確認した。		
		鎌倉時代	溝	須恵器、輸入陶磁器				
		室町時代	建物、溝、土坑、 集石	土師器、瓦質土器、焼 締陶器、施釉陶器、輸 入陶磁器、瓦類、金属 製品				
		安土桃山時代	建物、礎石列、溝、 集石、土坑	土師器				
		江戸時代	溝、井戸、水溜	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2023-2

## 富ノ森城跡

発行日 2024年2月29日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番  
〒602-8358 TEL 075-467-5151